



小海峽の草

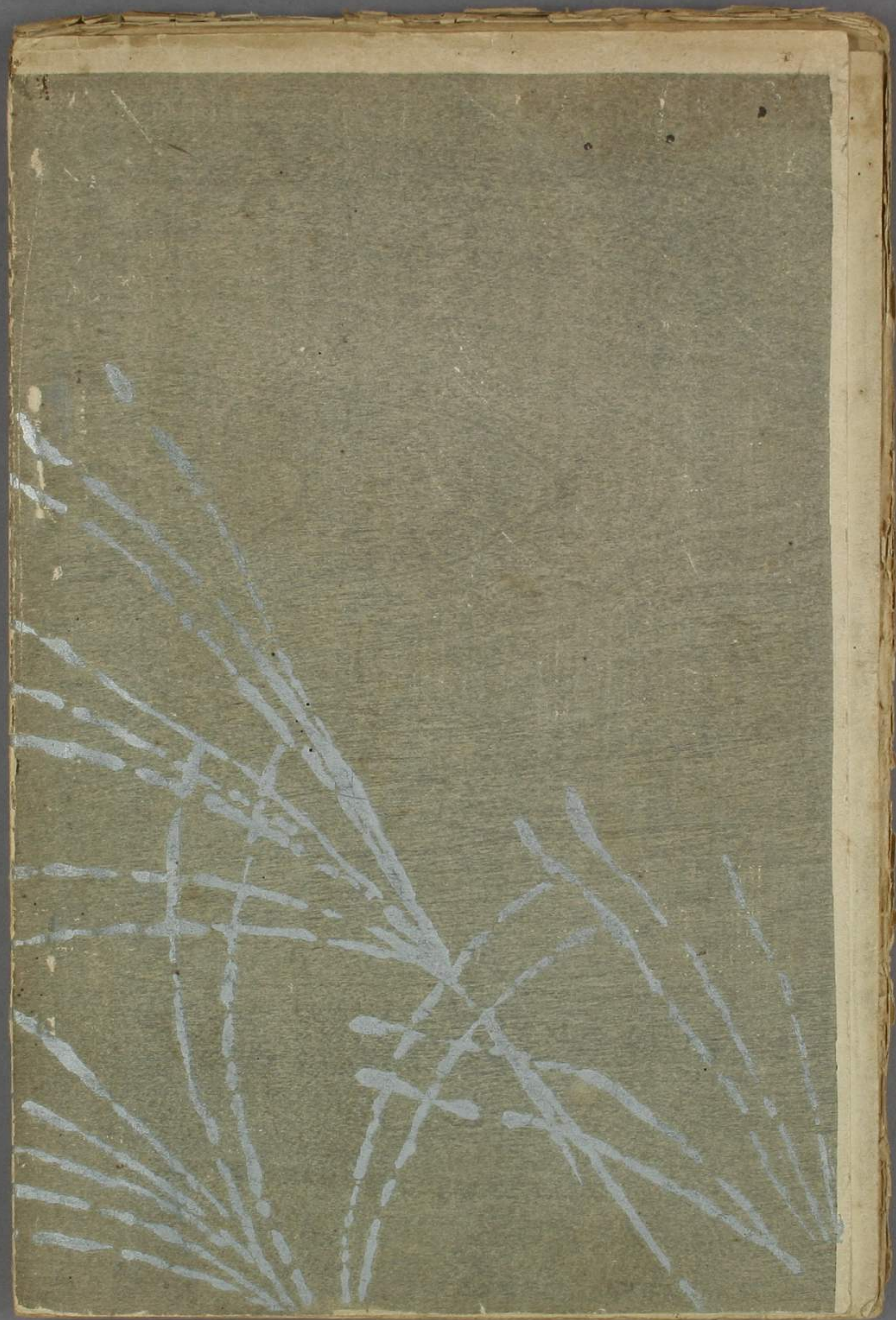
山崎



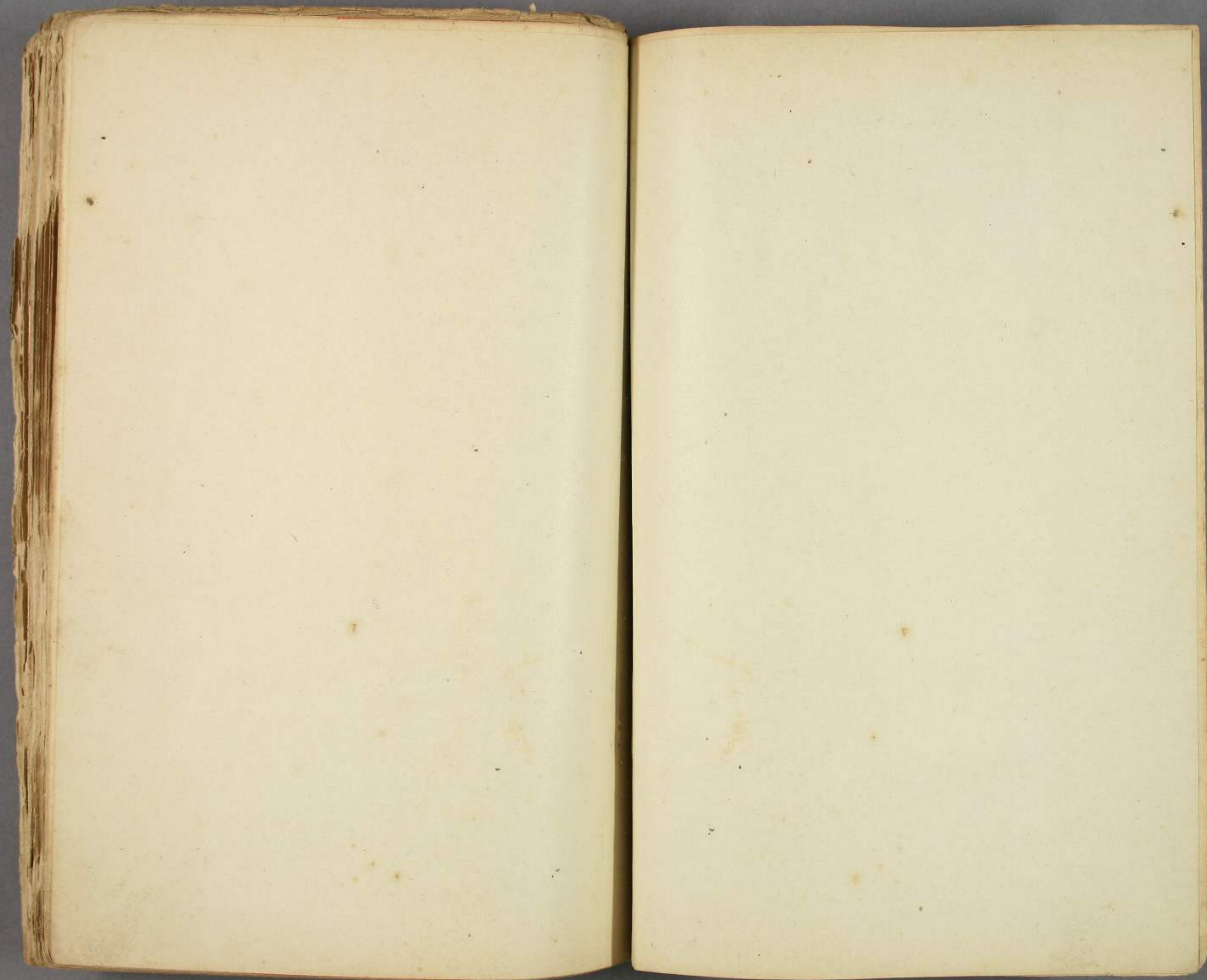














ね  
ぎ  
め  
く  
さ

高  
安  
月  
郊



ね  
ざ  
め  
ぐ  
さ

高  
安  
月  
郊



嵯峨野の露

珠をひらき

高き見ゆ



人物

齋藤瀧口時頼

建禮門院の雑司横笛

おなじく 刈萱

時頼の父左衛門太夫茂頼

内大臣平宗盛

大納言時忠

但馬守經正

三位中將維盛

左馬頭行盛

源氏の侍成田五郎

維盛の小姓石童丸

源氏の兵卒



其一 嚴島の春の夢

平舞臺、上手寄りに高舞臺(常足の二重の高さ)朱塗の欄干付、前、階段、  
後、上手斜に寶殿、下手へかけて奥深く廻廊、釣灯笼に火ともりたる  
體、其下海。

管絃の音にて幕あく。

高舞臺の上に内大臣平宗盛、欄干にもたれ、大納言時忠、但馬守經正、  
三位中將維盛、左馬頭行盛向ひ合うて合奏して居る。

宗盛(歌ふ)

梓弓春來る毎にすへ神の

とよの遊にあはんとぞ思ふ

時忠

こりや珍らしい内府の歌、とても事に舞うて見給へ。

宗盛

いや立上つては手足も動かぬ。三位中將が好からうぞ。

維盛

何として、左馬頭殿こそ舞ふてお見やれ。

行盛

いや我等よりは島の内侍を呼ばふではござらぬか。

經正

島の内侍も面白からず、それよりは建禮門院の雜司横笛、刈萱、彼等

二人に舞はすべし

宗盛

何さまそれが第一なり、それ中將!

維盛

ハッ(下手に向ひ)横笛、刈萱、これへまゐれ。

二人

ハア。

(横笛、刈萱、いづれも二十前後、五つ衣にて出づ)

横笛

お召しにござりまするか。

宗盛

今様一つ舞ふて見やれ。

刈萱

あの此場にて?

經正

囃子は我等がしてやらうぞ。

二人

恐れ入りましてござりまする。

唄

蓬萊山は茲なれや、

千代の緑の波の上

常盤の宮を浮べては、

潮の満つこそおかしけれ。



龍の宮居は茲なれや、

廊につらなるともしびの

花もゆらめく影さそひ、

潮の引くこそおかしけれ、

(二人舞ふ、經正、維盛、行盛雜す)

宗盛

イヤ見事々々殊にすぐれて見えたるは横笛が舞の手振、流石は神崎の

横笛

長者の娘、これへ來よ、盃くれん

宗盛

それでは恐れ多うござりまする、何の憚る事があらう、月もおぼろぢや、参らすば予が参り、廊のあな

横笛

エイ

時忠(少し笑うて) いやそりや無用ぢや、

宗盛

無用とは何故に、

時忠

横笛には戀がござる、

宗盛

エ、戀とは誰と?

時忠

それをまだ御存じないか、いつものながら長閑ぢやなあ

他の三人も

ハ、、、ハ、、、ハ、、、

宗盛

イヤ知つて居る、維盛であらうがな、

維盛

何として某か――

宗盛

然らば清經ぢや、清經ぢや、

四人

ハ、、、ハ、、、ハ、、、

宗盛

エイ人ぢらしな、云うておくりやれ、

時忠

小松殿ぢや

宗盛

エ、小松――いや、そりや嘘ぢや、あの物堅い兄上に何の左様な事があ

らう、

時忠

さ横笛と名を附けられたのは小松殿

宗盛

エイ名附親では無い、戀の相手は?

時忠

さ、それも其小松殿に仕へたる――

宗盛

何、兄上に仕へたる――

時忠

齋藤左衛門の太夫茂頼の――



宗盛

エイ茂頼が何の戀

時忠

さあ茂頼の子の時頼ぢやて

宗盛

あの時頼!

時忠

こりやとてもかなふまいな

宗盛(立腹の體)

イヤこりや聞捨てに相成らぬ、ヤイ横笛、そちやまこと時頼に見  
参したな

横笛

さあ、それは……

宗盛

真ならば免されぬ、女院に申上げ、屹度成敗せにやならぬぞ (嚴しく  
いふ)

横笛

エイ

宗盛(また柔に)

真で無くば天下太平、予が館へ申受けう

横笛

それは……

宗盛

どうぢや真か

横笛

それは……

宗盛

成敗しやうか

横笛

それは……

宗盛

まあ兎も角も参るが好からう

(手を取らうとする、横笛困却する)

時頼(下手より)

アイヤ、そりや真でござりまする

宗盛

何と

(齋藤瀧口時頼 二十三、花やかなる直垂、折烏帽子にて出づ)

宗盛

オ、時頼、さてはいよ、横笛と?

時頼

申譯も無き不義の大罪、いざ御成敗下されませ

宗盛

エイ落付顔の面憎さ、好し、予が手づから打つてくれう、それへ直れ

時頼

ハッ

宗盛

横笛も覺悟致せ

横笛

ハア

(二人前へ直る、宗盛刀を抜く)

宗盛

今が最期ぢや、時頼から——(刀を振上げる)

時頼

イヤ其御はかせでは切れますまい



宗盛

エイ

時頼

御先代清盛公、天童より賜はりし銀の長刀で願ひたい。

宗盛

何と？

昔相國此國に守護となり給ひし時、夢想の告に當社を再建、かく美々しくなりしかば、明神の使あはれて、銀の蛭巻したる小長刀を賜はりしが、悪行あらば子孫まではかなふまじと託宣あり。それより一家繁昌の果は四海を握り給ひ、君を侮り民を苦しめ、茲に極まる非義非道。

宗盛

黙れ、己の不義をくろめんと、聞き難い其雜言。

時頼

いや拙者の不義は御先代神授の長刀お受け申す。當家の不義は何人の刃を受けうと思召すぞ。

宗盛其外も

エイ

扇の芝に源三位、最期の筆を染められしが、令旨は飛んで東北、蛭が小島に兵衛佐、木曾の山家に駒王が白旗なびくけふ此頃、事も無げに歌舞音楽、こりや何事とござりまする。

宗盛

いや兄貴の口眞似止めはせい。假令源氏は起らうとも、當社の加護もあるからは、武運長久疑ひ無いわい。

時頼

いやそれも道にかなへばこそ、悪行重なる上からは、彼の長刀もござりまするか。

宗盛

エ？

拙者の不義をお正しあるなら、先づ御太刀からお砥ぎ遊ばせ。

時頼

(宗盛つまる)

イヤ口賢く申しをるな、しかし先の小松殿なら、さう云はれても恐れ入るが、己も暗い身の上で、諫言やら云拔やら誰が聞かうぞ。

宗盛

さうぢやく、己の非を包まうと人の非を數えるとは、いよく以て免されぬわい。(また太刀を上げる)

維盛(止めて)

いや兎に角、茲は神前なり、事荒立ては興がござらぬ。

宗盛

でも憎さも憎き彼の雜言。

維盛

まゝ穩にお遊びあれ、波も静な春でござる。

宗盛

然らば斯様致すとしやう。こりや時頼、手に横笛を取持ち致せ。



時頼

宗盛

時頼

宗盛

時忠

維盛

經正

行盛

宗盛

時頼

宗盛

劉萱

エイ?

然らば今までの不義の實否は糺しはせぬ。また其方にはそれなる劉萱予が媒して取らすぞよ。(劉萱驚しき思入)

何とおつしやる。

そればかりでは無い、一飛に安藝守、當家の一門としてやらうぞ。

イヤこりや比類無き出世ぢやわい。

瀧口から安藝守とは、前に例無き其ほまれ。

それにわの劉萱を妻にとは、これも劣らぬ秋の色。

花と錦を兩の手に戴くとは果報ぢやなわ。

しかしそれも横笛を——

いやあの拙者は——

平にそちに任したぞや。

(時頼田る、宗盛、時忠、經正、維盛、行盛入る)

ついに無い内大臣様の粹なおさばき、こんな嬉しい、いやお目出たい事はござりませぬなわ。

(時頼答へず)

時頼様——もうし時頼様——さあ一所に参りませう。先の歌の蓬萊山

此嚴島を其儘に島臺として友白髪、千代に八千代と祝ひませうか。

(時頼尙うつむいて居る)

エイ何を濟まぬお顔付、オ、そうぢや、それには横笛殿を取持たねば

なりませぬ。さあ早うあなたから——いやあなたからも云はれまい、

私が代りに勧めませう。もうし横笛殿、あなたもまあお目出たい、内

大臣様のお氣に入るとは、こんな出世はござりませぬ。御所の勤に引

さかへて、玉の臺の榮耀榮華、さぞ嬉しいうござりませうなわ。

劉萱殿、そりや誰におつしやるのぢや。

エ?

玉の臺の榮耀榮華、あなたなら嬉しからうが、心にも無い立身は此横

笛は好みませぬ。

それではあなたのお心では?

エイ好う知つて居る癖に、しらぐしい其云様、自身の戀がかなへた

横笛

横笛

劉萱

横笛

劉萱

横笛



さか。

劉萱 さう知られては隠しはせぬ、いかにも妾は時頼様に――さあ内大臣様

横笛 のお許しぢや、外からかれこれ云はれぬぞえ。

劉萱 いや得手勝手のおさばき、第一妾は得心せぬぞえ。

横笛 得心せずば其身ばかりか、時頼様はお手討ちや

劉萱 エ……………

横笛 それでも厭とおつしやるか

劉萱 さわ、それは……………

横笛 得心したら其身ばかりか、時頼様は無類の立身、それでも厭とおつし

横笛 やるか。

劉萱 さわ、それは……………

横笛 妾なら得心して、其身は兎に角時頼様の立身はかるが誠の思、お前は

横笛 まだ〜浅い〜

横笛 エイ外の事なら何なりと、君の爲なら忍ばふが、こればかりは忍ばれ

ぬ。假令斬られ殺されても、一所なら厭ひはせぬ、嬉しう思うて死ぬ

横笛 わいなあ

劉萱 いやそりや戀ぢや無い我儘ぢや、本の戀を教へて上げうか。

横笛 エイくどい聞きたうない、此横笛はどこまでも、思ひ切らぬと云うて

時頼 下され。さあ時頼様、早う一所に参りませう。

横笛 行かふとはそりやどこへ？

劉萱 浮世離れた山里で誰憚らず暮らしませう。

横笛 いやさうはなりませぬ、得心せずば御成敗直に受けねばならぬぞえ

時頼 そんなら受けるまでもなく、此舞臺から諸共に、此海へ身投げする。

横笛 何身投？

劉萱 いやそれもなりませぬ。茲は清浄な神の御前、汚れた體は勿體無い。

横笛 いや死ぬる身が何汚れ、汚れた心で死なれうか。さあ早う時頼様

劉萱 いや妾と共に海の藻屑

横笛 藻屑になるが本望か。

横笛 國守になるが仕合はせか。



劉萱  
横笛  
劉萱  
横笛  
時頼様  
劉萱

さあ、  
さあ、  
さあ、  
時頼様、  
時頼様

(二人左右より詰める)

時頼(二人の體を見て)

此身は藻屑となるとても、心の花は矢張横笛  
お嬉しう存じまする。

劉萱

いやそりや餘りではござりませぬか。内大臣様の御意といひ、妾も同じ心の中――

時頼

それ知らぬでは無けれども、國守につけて賜はるとは、慾にいざなふ御はからひ、人の譏り心の咎め、こりやどうあつても聞かれぬわい。

劉萱

それでは不義の御成敗を?

時頼

固より覺悟致して居る。

劉萱

エイ餘りぢや、國守が厭なら辭退して、妾と丈添ふが好い。妾も人

時頼

に劣らうか。死ぬとなら死ぬるぞえ。心を見せるすべあるなら、胸を裂いても厭はせぬわいなあ。

横笛

其志は嬉しいが、今更どうも是非が無い、此次の世を待つて居られよ。

劉萱

いや次の世もいかぬぞえ。

横笛

エイ妬ましい二人の中、鬼になるとも蛇になるとも裂いて離さにや置かぬわいなあ。(覗みつけて入る)

時頼

イヤ恐ろしい執心ぢやわい。

横笛

何の恐ろしい事がござりませう、命投出す上からは、人の恨も世の咎も、籠の塵でござりまする。

時頼

ほんに高根の花盛り、浮世の風に散らぬ間が、只一時も千代よろづ代

横笛

(云ひながら高舞臺へ上る、横笛も續いて上る)

時頼

月もまばゆき百八の春をめぐらす灯笼に、

横笛

波の上にも玉散りて、胸の思と満ち潮は、

時頼

宮の下まで戀の海、鳥居に通ふ千鳥さへ、

時頼

おのが妻呼ぶ夜の鹿、うきを忘るゝけしきぢやなあ。



(二人あたりを見まはして互に寄りそふ。  
齋藤左衛門太夫茂頼 冒を着、銀の紐巻したる長刀を持って上手よりつかく  
と出づ)

茂頼  
時頼  
たわけ者め。  
ヤ父上……

茂頼  
時頼  
神前を憚らす、君命を蔑に、此有様は何事ぢや。

茂頼  
時頼  
ハッ……  
既にお咎めありながら、尙こりすまに不義の罪、重ねるは其身ばかり  
か此父までも落とす所存か。

時頼  
茂頼  
こりや、ヤイ、若年ながら其方も小松の大臣にお仕へ申し、御教訓の  
端も聞いたで無いか。榮華の餘り懦弱となり、色に溺れし藤原の跡に  
代つて平家まで同じ破滅の道行は浅ましうは思はぬか。今にも諸國の  
源氏のつはもの、攻め寄せ来らば何とする。一人にても武を勵み、傾

く御運止めねばならぬに、己も同じ色に溺れ、親まで罪を着せんとは  
不忠不孝の人非人、我手ばかりか清盛公の御折檻と思ふ知れやい。(又  
打つ)

時頼  
茂頼  
恐れ入りましてござりまする。  
いや恐れ入つたで相濟まん、さあ早く物の具つけい。  
エ?

茂頼  
時頼  
敵早富士川まで押寄せたぞ。  
何、富士川まで、  
少しも早く駆けつけよ。  
ハッ御免。(急いで行きかける)

茂頼  
時頼  
いや待て時頼、出陣なす其前に先づ此横笛を何とする。  
さあそれは……  
門出の血祭斬つて捨てい。  
エイ。  
それにて忠孝相立つぞ。



時頼

そりやまたあんなまり……

茂頼

エイまだ未練、其身の潔白内府の迷霧らすはたつた一打ちや。

時頼

それぢやと申して……

茂頼

いや斬れずば出陣無用に致せ。

時頼

エイ

出陣所かおめくくと我までお咎め受けんより、先づ潔よう相果てる、せめて其方介錯致せ。

時頼

まわお待ちなされませ。

茂頼

然らば女を斬つて捨てるか。

時頼

それはどうも……

茂頼

エイ卑怯者、汝斬れずは吾君の御前へ連行さ此茂頼、手づから斬つて

時頼

我も死ぬ、死んでお諫めせにやならぬわ。

時頼

これまわお待ちなされませ。(止める)

茂頼

エイ離しをれ。(振り切つて引立て入る)

時頼

もし父上——父上——横笛——

(跡を追うて行きかける、風の音、たたくとなる、廻廊の灯皆消ゆ。暗くなる、源氏の軍兵大勢出づ。)

時頼

こりやもう源氏が——

(皆懸る、立廻り、軍兵逃入る、時頼追うて行きかける、刈萱の着付にて出づ。)

刈萱

なう時頼殿待ち給へ、恨の一念忽ちに横笛との中裂きたり、これより

時頼

は妾と共に龍の宮まで來給へかし。

時頼

エイ邪魔致すな。

(拂ふ、刈萱付きまよふ、惱まされる、時頼刀を振上げる、刈萱消ゆ。時頼上手へ行きかける、宗盛白衣にて髪亂れ色青ざめて出づ。)

時頼

ヤ吾君——

宗盛

敵早都へ攻め入つて、一家の館は烟となつたぞ。

時頼

さては都へ!

(茂頼手紙を負うて出づ。)



時頼

オ、父上も

茂頼

所々の防ぎ矢かなはず、我も重手を負うたるぞ。

時頼

ニイ

(時忠、經正、維盛、行盛白衣にて逃來る。)

時忠

當社も敵の手に落ちたり。

經正

早々西へ落ち行き申さん。

維盛

これより西は波又波

行盛

同じ海なら此前の波間へ遁れ入り申さん。

宗盛

あれく、波と敵の軍勢こなたを目がけて寄せるわく

(時頼高舞臺へかけ上る、刈萱後へ現る。)

刈萱

さあ妾と諸共に

時頼(拂うて)

横笛 横笛

(大風波の音、皆々懼むこなし。居所變りにて)

### 其二 嵯峨野の秋のうつゝ

時頼

アまた浮世の夢を見たなわ。(虫の音)

戀と忠孝二筋の絲のもつれのほどかれず、戀も捨て世も捨て、秋の草より枯れ果てたに、夢は昔の春を見て、花の嵐に惱むとは、いつまで残る吾心(四方を見まほし) 嵯峨も浮世の端であつたなわ。

(外へ出て、花など摘む)

(維盛笠をかぶり姿をやつして子姓石童丸つれて出づ)

維盛

嵯峨の奥とばかりにて、確にそこと知らねども、垣もまばらの柴の庭

大方此處等であらうわい。(石童に指圖する)

石童(時頼に)

一寸お尋ね申しまする。瀧口入道の庵室は此あたりでござりませ



るか。

時頼 エ瀧口 (石童より維盛の顔を覗きて) ヤア三位中将ではござりませぬか。

維盛 オ、時頼 (笠を取る、互に姿を見合はせ) ま思うたよりもやつれ果て、

時頼 あなたもお變りなされましたなあ。(並み) して何として此庵へ?

維盛 話す事あり聞く事あり。

時頼 それでは此方へさあお通り。

維盛 許してくりやれ。(庵の内へ入る)

時頼 さて何から話して好からうやら、先づは健固といひたいが、そちも我も此姿、目出たいとも云はれぬのう。

時頼 都をお落ち遊ばしたと人の噂に聞きましたか、どこまでお出で遊ばしました。

維盛 一先づ豊後へ落延びたが、そこにも居られず引きかへし、中國四國と

浦づたひ、遂に一の谷にて防いだか、九郎の手だてに攻め落とされ、

時頼 經正、忠度、敦盛殿、討たるゝものは數知れず。

時頼 何、經正様も——さては父も討たれましたな。

維盛 茂頼は重手を負ひしが、命ばかりは取りとめたり。

時頼 して御一門のお行衛は?

維盛 跡は屋島へ通れたが、茲も何やら落ちつかれず、松吹く風も矢叫びか、

時頼 水鳥も白旗かと心を休むる隙は無いわい。

維盛 して何故にお一人にて?

時頼 所詮はかない平家の運命、いつまでうきを忍ばうより、そちを頼りて

維盛 我も亦姿を變へうと思ふのぢやが、其の前に只一目跡へ殘した妻や子

時頼 に逢うて別を告げたいが、どこに隠れて居る事やら、そちは承知致さ

維盛 ぬか。

時頼 いやそりや御末練でござりませう。

維盛 何と。

時頼 一旦お落ち遊ばすからは、再び御代となされずに、お逢ひなされて何

維盛 の詮、却てお嘆き増すばかり、出家のお邪魔となりませう。

時頼 でもなつかしい此歳月。

維盛 其お心故此敗亡、戀も情も斷ち切らずば、御出家も出来ませぬぞ。



維盛

エ……

時頼 それが出来ずばお歸りあれ、世を遁れたとて樂はござらぬ、死ぬより  
苦しい思の中通り越さねばなりませぬわい。

(風の音)

石童

何やら人音

時頼

アこれ (押へて二人にさゝやき床の下へ隠す)

(源氏の侍成田五郎兵卒つれて出づ)

五郎 (直に内に入り)

瀧口入道とは其方ぢやな。

時頼

いや瀧口は昔の夢、今は阿淨と申します。

五郎

何にしても同じ事ぢや、今此庵へ三位の中將が來やうがな、

時頼

ハ、ハ、ハ、三位も四位も夢の夢、五位驚もまゐりませぬ。

五郎

エイ隠しても此あばら屋、若し居つたなら參さぬぞ。

時頼

さあ、あばら屋故隠しはしませぬ、疑はしくばお探しなされ。

五郎

云ふまでも無く家探しするのぢや。

時頼

しかし家探して居られずば、其儘にはしませぬぞ。(屹といふ)

五郎

エイ

時頼 いやかんで見るも昔の事、今は空しい此草庵、どうなと勝手になさる  
が好い。

(維盛を入れたる上にすぼり、經を見る顔して目を配る。)

五郎 (兵卒に) それ!

兵卒 ハア。

(皆家探しする。知れず。)

兵一

どこにも見えぬ様にござりまする。

五郎

でも這入つたに相違無い。

兵二

もしやあちらの祇王の庵ではござりませぬか。

五郎

いや祇王祇女も今は居らぬ、佛も本の佛になり、青道心は瀧口一人ぢ  
や。

時頼

そんなら今宵はお泊りなされ、鹿の鳴く音によもすがら嵯峨のあはれ  
を聞かせませうか。

五郎

エイ左様な隙は無いわい、しかし此儘には歸られぬ、草を分けても詮  
二五



時頼  
五郎

議するのぢや。  
まあ峰の嵐にお尋ねなされ。  
忌々しい奴ぢやわい。(音つれて入る)

維盛

(時頼門の戸を閉ぢ、床板をめくる、維盛石童出づ)  
茲も劔の中であつたか。

時頼

これでも御臺や若君を尋ねてお出でなされませうか。

維盛

ほんに逢うても心づかひ、更にうき目を見せうより、此儘遠い高野か  
熊野、靈場浄土へ行くとしやう。

時頼

それこそ誠に解脱の始、御道しるべ致しませう。

石童

すりやあなたが御案内を。

時頼

これも残る御恩返し、盡させぬ御縁でござりませうなわ。(音を思ひまはす思入)

維盛

そんなら上人。(言葉を変めていふ)

時頼

エ？  
よろしうお頼み申します。(丁寧に云ふ)

維盛

(時頼涙を拭ふ、維盛石童奥へ入る)

唄

浮世とはいつ秋より云ひそめて、

春の心も夢とする、

君はいづくに通れけん、

月も隠るゝ廣澤の

水の鏡も曇りては、

千代の古道露しげく、

竹もしたゝる野の宮に、

山は嵐と誰がつけし、

もみぢ散るとも大堰川

色はしがらむ白波に

問へば答へぬ松風や、

君はいづくにおはすらん。

(横笛出づ、あたりを見まはして、枝折戸に尋寄る。)



横笛

少しお尋ね申します。法輪寺とは此邊でござりまするか。

時頼

何法輪寺、法輪寺は茲でござる。

横笛

それなれば此お寺に時頼様といふお方がお出ではござりませぬか。

時頼

エ？ (急いで戸口へ行き覗き見て驚く)

横笛

三條の齋藤左衛門茂頼様の御子息、瀧口にお勤めありし時頼様でござりまする。

時頼

(聲を造りて) いや左様な者は茲にはござらぬ、余所を尋ねて御覽なされ。

横笛

でも確に嵯峨の奥、法輪寺と聞いて居ります。

時頼

法輪寺は茲なれど、嵯峨の奥には奥がある、浮世遁れた隠れ家はとて

横笛

も知れるもので無い、それより早うお歸りなされ。

何歸れとは

悲しやな道も勤も關の戸も

抜けて野山をやうくと

涙しほりて歸れとは

(月出づ)

横笛(其光に)

ヤ吾夫ではござりませぬか。

時頼

いゝや違ふ、人違ひぢや。

横笛

エイ其お聲が吾夫ぢや、茲明けて下さりませ。

時頼

いゝや昔は誰にもせよ、今は浮世を捨て法師、訪はれる覚えは更に無

さわす。

横笛

覚え無いとはお恨めし。

唄

秋は深けても一歳に

足らぬ彌生の櫻狩。

思ほころぶ春の日は

暮れておぼろの梅壺や、

香身に染む渡殿に

ゑにし引きあふすがづなの



鈴はおさへてつま琴に  
しらべ合はせて語りしは、

横笛  
時頼

あなたは忘れ遊ばしたか。(月曇る)  
さ、それ故に世の咎め、君の御不興、父の立腹、あなたをなかに責め  
られて、果は浮世を厭ふたわい。

横笛

時頼

横笛

時頼

横笛

其お心がお恨めしい、いかにさはりはあるとも、戀の誠は何恐れ、  
所詮此世で添はれずば、一つ蓮の身となりて、共に佛に仕へませう。  
それではいよゝ世の咎め、君父の怒を重ねる次第ぢや。  
茲も浮世の風吹くか、捨てた山家ちやござりませぬか。  
捨てた山家も浮世の嵯峨、夢を遁れる里は無いわい。  
それではどうでも此儘に?  
そなたも夢とあきらめて、都へ歸るが好からうぞや。  
ハア——(泣伏す)

唄

君は夢ともなせばなせ、

うつゝ苦しき戀の果、

何となれとや我ひとり、

たより無き身と知りながら、

(横笛悲嘆のこなし)

げにたより無き身なりけり、

何となるらんわはれやな、

よしや茲には留めずとも、

一目逢ふとも悪しからじ、

逢ふや逢はずや柴の戸も

共にゆらめく心かな。

(時頼思ひ亂るゝこなし)

時頼

お耻づかしや御佛の前に誓うた上からは、世に無き者と思ふが好い。

(入りかける)

横笛

まあ待つて下さりませ、假令何とおつしやつても、妾は都へ歸れませぬ。



時頼

そりやまた何故。

横笛

平家都落の其後は入れ代つて木曾の狼藉、やうく落ちたと思ひましたら、矢張同じ源氏の世、平家のゆかりあるものは、さまざまうき目に逢ひますもの、何として歸られませう。

時頼

ア此世はいよく秋の暮ぢやなあ。

横笛

それ故何と致しませうなあ。

時頼

さ、そちも浮世を、いや月に尋ねて行くが好いわい。(奥へ入る)

横笛

あ、もし吾夫、今一言でござりまする、も一度お出で下さりませ、もうお願いは致しませぬ。只お心に變りは無いか、それ丈お聞かせ下さりませ、それであきらめますわいなあ。

(時頼遂に出です)

唄

世のうさも人の恨も今更に

茲に極まる思かな。

都忍びて出でしより、

消ゆとも君を離れじと、

思ひ定めし吾いのち、

落つる時雨に馬の葉の

散るや千鳥の淵こそは

戀のうき身の捨て所、

茲の藻屑となるならば、

あした夕の往來にも、

しばしとゞまり弔ふて、

露の涙の落ちもせば、

それを頼りに後の世の

朽ちぬ戀こそ待つべけれ、

今は盡させぬ思のみ、

君のおもかけ染めて入る。

(横笛名残惜しげに振りかへりく花道の中程まで來り、決死の思入にて入る。

月照る。



胡蝶軍

時頼つかくしと出で、跡を見送る、入水の音。紅葉散る、時頼断腸の思入、手を合はす。鐘の音。千鳥の聲をかすめて暮。

言

(明治三十九年五月大阪中之芝居に於て第一回興行)





總  
辦  
其







海原や、海原や、

海原の果はいかにぞや。

雲落ちぬ、日も落ちぬ、

天も落ち入る海原の

果無き果はいかにぞや。

風、長鯨を羽ばたけば、

浪、老龍を鞭うつこ、

鱗むしるか散る花と

光り碎くる水鳥や、

空も血走る夕焼の

果は炎と裂けにけり。

秋津島根も裂けにけり、



花と吉野も散りにけり、  
こがねきらめく衣笠に、  
しろかねかへす東山、  
それも木の芽と烟りけり、  
鶉飼の篝闇となり、  
天狗ついはむかげるふの  
一羽争ふあはれさよ、  
總て占めても尙足らぬ  
小野のふすまは寒からん、  
夢冷かに秋を見る  
丘の枕に就かんより、  
見よやあなたは果も無く、  
行けば行かるゝわだつみや、  
袖を止むる綱も無く、

足を遮る縄も無く、  
波立てば船揚がり、  
風吹けば船走り、  
月をかざしつ、目を載せつ、  
旗は白帆、八幡の  
我も菩薩の一人かや、  
いで六龍を驅り立て、  
虎駈ける野に波かけん、  
吾狩場こそあなたよ、  
吾領地こそあなたよ、  
雌波は何を夢むらん、  
おもてに浮ぶおもかけは  
人の姿か、吾影か、



いつしか出づる月かげの  
たゆたふ方を見かへれば、  
一すぢあるか無き山の  
迷ふは誰のふるさとぞ。  
父は吉野に埋れけり、  
母は落花を追ひにけり、  
獨り立ち行くあめつちの  
中に家さへ無きものを、  
たれ我爲に思ふらん、  
三笠の山に啼くは鹿、  
われ誰爲に悲しまん、  
鳴の河原も千鳥のみ、  
思ひかねたるわきもこも  
壁紙の虫の音絶えぬらん

琴のしらべをしるべにて  
行きしはかゝる夜なりけり、  
かつきほのめく初花に  
車やどりの春の風、  
香移すや直垂の、  
袖は觸れてもむね晴れぬ、  
空に息つくおぼる夜は  
あけて歌とぞなりにける。  
歌は通へば歌かへり、  
かなふ心に尙違ふ、  
上と下との世のへだて、  
我も伏屋に生れねど、  
今は日かげに潜む身の、  
玉のうてなの姫宮は



風と洩入る隙も無き、  
繩を切りても、綱まとひ、  
もつれもつるゝ小田卷や、  
果は一太刀切りにけり、  
父の大臣は倒れけん、  
姫も黒髪切りにけり、  
戀も恨も断えにけり、  
断えし戀路を思はねど、  
行手遮るおもかけは  
琴の恨の荷切れず、  
墨の衣に痕とむる、  
涙月にや問はるらん、  
我は泣かねど月曇り、  
問ふも甲斐無き涙かな。

太郎はそびら帆柱に  
寄せて仰げば星も泣く、  
舟子も泣くか落さじと、  
途に目に持つ一しづく、  
唯筆葉に洩らさんと、  
一聲吹けば龍も泣く。

雄波は何を恨むらん、  
玆に隔ては無きものを、  
空を叩けば雲怒り、  
月を奪へば影消えて、  
風も叛くや西東、  
海は此世と亂れけり、



海も此世の中なりき。  
海のあなたも同じきか。  
憂ひ給ふないづくとして  
同じ行衛は平戸より、  
前は自在の波風を、  
さなり使うて進まなん、  
こち吹かば福建や、  
北吹かば廣東や、  
温州や、臺州や、  
臨觀もよし、淮陽も、  
遼陽も、天津も、  
天につれて襲はなん、  
吳山の雪と八幡の  
此白旗を立てよやと、

呼べば答ふる五十艘  
四方の櫓を打叩き、  
駒もかけ行く海原に、  
平地百歩の浮城や、  
八幡船ぞ鬼走る、  
八幡船ぞ神早き、

一一

胡蝶よ、胡蝶よ、帳にとまれ。  
牡丹は咲くとも、閨こそ春や。  
蘭麝の香をいのちとしめて、  
浮き立つ翼を金糸に縫はん。  
胡蝶よ、胡蝶よ、枕にとまれ。



夜半の雨聴くひとりはさびし。  
雲母の窓渡るおぼろの影に、  
ゆかしき夢こそかすかに示せ。

胡蝶よ、胡蝶よ、北の野いかに。  
南の園には日かげぞ弱き。  
かざしの花びらなれより脆く、  
くれなる、ひらさき、幾たび變る。

胡蝶よ、胡蝶よ、東はいかに。  
西には關より烟も見えず。  
霞はいづくの戀路に迷ふ。  
風さへ、なれさへ、などものいはぬ。

胡蝶は歌と消えにけり。  
朱のおばしま白鳩の  
落つるは誰の使ぞや。  
けさの鶺鴒うれしきに、  
問へど鸚鵡の只返す  
瑠璃の壁さへ冷に、  
床も象牙や、龍鬚の  
ひしろ五色わづらはし。  
碧瓦波彫る長廊を  
丹履痕無く夢引きて、  
あゆみものうきささはしや、  
登りなやめるうてなより、  
虹をたどればたかどの、  
鳳のそびらに日は斜。



かざしまばゆく見下せば、  
園もまばゆきふかみぐさ、  
色は幾色、くれなるの  
錦つらなるあなたには、  
こがね幾すぢ、帯長さ、  
下に見えすくうすものや、  
烟籠めたる紫と、  
玉を重ねつ、また削る  
葉さへ千よろづ、濃き、薄き、  
上を亂すや一風に、  
炎幾色、花燃えて、  
香、烟と日を蒸せば、  
光むせぶか、こがね散る  
中に立ちたる香玉や、

銀釵射返すきらめきには、  
鬢も緑の雲匂ひ、  
頬は豊に紅さして、  
目にはなさけの夢うるみ、  
思こぼるゝ唇の  
色も花びら吸ひにけん、  
袷は一ひら稍解けて、  
上着すべりつ、また落ちぬ  
裾にゆらめく風の香や、  
袖に染み入る花の氣に、  
我とえ堪へで身を寄する  
珊瑚に帯もまとふらん、  
銅抜き取り花を洩る  
蝶の翼に擲てば、



憎くやはづれて池に落ち、  
魚ぞ驚く藻の光、

孔雀上るか鞦韆の  
影力無くゆれにけり、

蘭草の燈日に代へて、  
照らす夜光の盃や、

鵝頂のひさを葡萄吐き、  
牡丹飲みては顔燃ゆる

あるじは姫を呼びて來つ、  
「花の神來りしか。」

「神も來らず、鬼も來ぬ  
長き一日の堪へがたや。」

「花の真中にありながら、  
花の王さへ寄せながら。」

「涙きに過ぎたる色香より、  
櫻一枝眺めたや。」

「得易からざる需かな、  
駒は波路を越え來れど、

鞍に乗せなば花散らん、  
移し植うとも色變る、

國も異なる香には、  
換えんよしなき一枝より、

うつす面影、書屏風や、  
手にも取らるゝ書扇や、

鏡、香篋、厨子、几帳、  
刀は我も得たけれど、

交易の途止めてより、  
貢求めんよしも無し。」



姫は東を眺めけり、  
羅福は北を顧みて、  
北斗の光など強き、  
慶雲いづくに迷ふらん、  
甘露ことしも降らずや、  
靈芝、瑞麥、白鹿に、  
白兔は月に需めなん、  
金丹未だ成らずや」と  
呼べば方士は蛤に  
不老の藥載せて來つ。  
飲めば常世の春の身や、  
四方の珍肴いざ嘗めん、  
東の海の鱗裂き、  
西山の鳳あぶれ。

松江の鱧まだ無きか、  
熊の掌、豹の胎、  
鶴のわつもの先づ吸うて、  
盡さぬいのちは盃も  
玉の色々過ごさなん、  
美女の色々酌めよやと、  
呼べば出て來る春の星、  
何を笑むらん雪洩らし、  
袖は掩はぬ白鸞の  
羽にまじるや黄龍と、  
めぐるあるじの右左、  
肉の陣こそゆたかなれ、  
魚腦たさをへいざ酌まん、  
肥えしは歌へ聲揃へ、



瘦せしは舞へや身を軽く、  
胡蝶の舞をおもしろき、  
胡蝶と舞へと一聲に、  
胡蝶と立てば風舞ひて、  
胡蝶の群ぞ飛び来る、  
胡蝶軍ぞ攻め来る。

三

胡蝶はつるぎ舞はしけり、  
花は飛びちる肉の陣、  
龍の鱗も飛びにけり、  
鸞の翼も散りにけり、  
玉は香とまみれけり、  
酒は薬と流れけり、

方士は鳥と飛びにけん、  
僕は魚と遁れけり、  
あるじは花に隠れんと、  
うてな下れば虹抜けて、  
たよるおぼしき珊瑚折れ、  
瑠璃も雲母も身を照らす、  
光苦しき長廊下、  
死なぬいのちもしばらくの  
影に消えんと葉に入れば、  
中も耀く牡丹より、  
殿を焼き打つ松火に、  
炎一色花燃えて、  
こがね、しろかね、皆焦がす  
光なめゆくあめつちの



中を動かぬ香玉や、  
裾も上着もくれなるの  
頬も耀く火の色に、  
鬢は亂れず雲晴れて、  
目のみ静に月仰ぐ。  
こは火の花か、花の魂？  
胡蝶のむれは觸れもせず、  
あたりめぐりて只守る。  
猛き炎は漸くに  
うてな登りて裾に這ひ、  
帯に、袂に、まとふらん、  
あなやと叫ぶ一軍の  
聲の中より烟抜け、  
炎ひらめく緋をどしの

鏡も甲も火を立て、  
羽織吹き散る若武者は、  
誰ぞや、太郎か、香玉を  
脇にはさみてうてなより、  
花と胡蝶と飛びにけり。

四

火は消えぬ、  
牡丹も消えぬ、館消えぬ、  
残る煙の柱より  
西にむせばし月も消ゆ、  
八重の塔より見渡せば、  
國も幾たび消えにけん、  
風英雄の火を吹きて、



沙列朝を載せて去り、  
山河空しく日を磨りて、  
朱氏の光も消えんとす、  
星はいづくに迷ふらん、  
北に南に雲凝りて、  
城に落ち来る夜嵐に、  
陵の草先づ泣けば、  
獨り怒るか鼻の  
おのが古巢を奪はれて、  
破れし礎に羽ばたきし、  
瓦壊るゝ壁の畫も、  
剝けて痕無き天人の  
影今更に立つやらん、  
姫は耀く色さめて、

青き篝のかけ背け、  
梢見る目は心無く、  
心見る目は面長に、  
黒きまなじり稍釣りし、  
竹の姿のめづらしや、  
太郎は花の火は消えて、  
天女おぼろの光さへ、  
色と残れるたをやめや、  
衣もかざしも髻も  
暗き木かげに見かはせば、  
國の違ひも忘れけり、  
言葉通はぬ憾みさへ、  
心忘れて空となる、  
ほとり過ぎ行くほとゝぎす、



あはれ一聲何と啼く。  
姫はみかどの魂の  
廟出でしとふるひけり。  
太郎は歸るふるさとの  
誰の思や呼びにけん。  
消えんとしてはまたあかき  
火かけは何のしるしぞや。  
二人は更に耳立てば、  
梟笑ふか老の聲。  
姫はいよ／＼身を寄する、  
胸冷に見まはせば、  
石狗息吐く木蔭より  
狭霧洩るゝは誰ならん。  
「ないぶかりそ我はこれ

馬祖師と名のる方士なり、  
不老の薬偽りて、  
羅福の館に登りしに、  
早くも寄する胡蝶とは、  
心合ふたる若者や。  
我も胡蝶の術知りて、  
見えつ、隠れつ、自在なる  
いくさ共々合はせなば、  
朱氏に代るも易からん。  
「朱氏に代りて何かせん、  
國を取りても尙満たぬ、  
心に違ふ妖術は  
をこのしれもの惑はせや、  
我は吾身をあからさま、



天が下横ぎらん。」

「さては何をか取らんとす。」

「こがね、しろかね、玉、寶。」

總て一味に取らせなん、

分ち取れよ。」とまきちらす、

跡に残れるたをやめは

誰の獲ものと取らすらん、

大軍來つ、と呼ぶ聲に、

太郎は太刀を取りて笑む、

五

日も白旗に笑みにけり、

かたきの旗はいくばくぞ、

千よろぐとともくろがねの

鏑一矢に碎かなん、

こがねに買ひし將軍に、

法に騙らるゝものゝふや、

假の道さへ強ひられて、

むねは此の世のいのち戀ふ、

鈍き龍刀打ち落とし、

腐れし腹を劈いて、

日の本の刀揮へよや、

日の本を離れても、

こは日の本の刀ぞや、

これ日の本の男ぞや、

日の本の男萬あらば、

四百餘州、四億萬、

大明抜くも易からん、



先づ小鼠を拂へやと、  
螺の音一聲、虎吼へて、  
扇揮へばしるかねの、  
光見ぬまに龍躍り、  
枯木裂け散る白烟、  
紋もひらめくまぼろしの、  
蝶と消えては血を残す、  
草葉短き小袴や、  
もろ手空切る裸武者、  
二人一打四つとなり、  
弦の響の盡きぬまに、  
五つ六つ八つ倒れ伏し、  
秋の錦と野を染むる、  
痕なまぐさき夏の市。

焼けや、焼けや、皆焼けや、  
草も、林も、山も、野も、  
焼て過ぎ行く國郡、  
火焰の王と我ならん、  
火焰の前に誰か立つ、  
火焰の後に誰か伏す、  
立つも伏すも皆焼て、  
火焰の領となさんすと、  
浙の東西焼きにけり、  
江の南北焼きにけり、  
通泰も焼き、崇徳も、  
嘉興も焼けば、旌徳も、  
太平も、江寧も、  
南京までも焼きにけり。



千里一炬の茶毘の跡、  
骨となりしはいくばくぞ、  
一味分れて右左、  
跡は處の曲者や、  
元の遺臣も、逐客も、  
我と流るゝ俠客も、  
網を破りし囚人も、  
網をくられる商人も、  
酒に伴る詫び人も、  
里に忌まるゝ風の兒も、  
寄せて使ひつゝ、取りつ去る、  
炎飛びちる天が下、  
炎知らせし朱氏の世も、  
炎亂すはなどやらん。

伽藍の神もものいはず、  
陽明の人早死して、  
良知邪説と忌まれけり、  
八幡の旗四方に照る。

六

山静、

溪空し、

精舎の内ぞいと寂つ、  
松春秋の筆措けば、  
瀑太古より雪解きて、  
霧と吹き散る日月の  
光吸ふらん昔は肥え、  
額「天真」の文字も染む。



門の扉は鳥書き、  
巖刻める四方の壁、  
竹の林は幾倍の  
琴に詩うたふ鶴ありや、  
一羽歸るよ一角の  
翠微少しく雲切れて、  
西湖迷ふは誰が夢ぞ、  
八卦の田さへうらなはぬ  
翌の胥海の波よりも、  
茲のけふこそ静なれ、  
堂に祭るは文正か、  
孔丘も見ゆ、釋迦も見ゆ、  
達摩老子と睨み合ふ、  
僧や、儒生や、道人や、

おのが木主を抱きては、  
人の廡を借りて避く、  
國の亂をいかにせん、  
あはれ胡蝶に追はれけり  
胡蝶ゆめみし夢人も  
うつゝ胡蝶に追はれては、  
夢を思へどまゝならぬ  
いのち苦しき露の身や、  
露の身ながら火に死なん  
思すゝしく袖あつく、  
あつき思に遁れしが、  
寒き衣に秋風や、  
伯夷火を吹く寒山の  
鍋に小魚も無かりけり、



大國を治むるは  
粥煮るよりも難きかな。  
且つ坐して湯をすゝれ。  
茶さへあらねばおのづから  
酒との中を得たりけり。  
是非は厥の盡さぬまの  
天を待つこそ樂しやと、  
一人笑へば、一人泣き、  
一人怒るか、ものいはぬ  
中へかけこむたをやめや、  
これも胡蝶に追はれけん、  
あはれ落花をいかにせん。  
風に任せて見るべきか。  
そもまぼろしと拂ふべき。

鶴も煮るべきあやうさに、  
花も寄せては琴焚かん、  
先づ溪河の水くめと、  
桶を渡せば打ちしほれ、  
琴を焚くとはこゝろなや、  
花は琴柱をたよりしに、  
悪しき處へ來りけり、  
悪しき時に逢ひにけり、  
こがねの殿の生まれても、  
玉だれの中春籠めて、  
鏡さびしきおもかげを、  
いつか撰られて召さるとも、  
羊とまらぬ三千の  
房にかけ無き君の思。



書さへ僞る秋風に、  
胡地の草とも枯るもあり、  
春を占むれば國亂れ、  
うまやの泥に染むもあり、  
我は犠牲逃れしに、  
父はいろどる檻堅く、  
夢も許さぬ禁園の  
扇開くはつまならで、  
翼異なる胡蝶とは、  
花の夢とも消えよとや、  
花は散るともしばらくの、  
春のいのちはあるものを、  
我は咲くまに風吹きて、  
夢も見はてぬ悲しさよ、

悲しきはげは女かな、  
救ひ給へや御佛も、  
父も、君も、聖さへ、  
え救はぬとはつれなやな、  
救はれぬ身の同じくは、  
蝶の翼に散り行かん、  
あはれ胡蝶ぞつれ行け、  
胡蝶の君に任さん、

胡蝶は窓に入りにけり、  
胡蝶の君のそれならで、  
胡蝶の虫の生憎に  
袖をめぐりつ裾に這ふ、  
あやしの蝶の振舞や、



これも心のあるやらん、  
幻か、玄か、怪力か、  
亂神は我知らず、  
我は知らねど彼知りて、  
女さそふぞいぶかしき、  
こゝろ悪るやと香玉は  
袖を拂へば尙寄りて、  
右に左に跡慕ふ、  
早おそはるゝ夢心地、  
あれよと叫ぶ聲掩ひ、  
羽に抱けば目もくらむ、  
あはれひらめく稻妻と  
飛ぶよ、走るよ、羽裂けて、  
蝶は馬祖師と消えにけり、

我天真の主たらん、  
僧も、儒生も、旗持てや、  
道士も太刀を執れよやと、  
姫の手を取り、壇登り、  
拜めと呼べば颯風、  
落葉地に這ひ右左  
行さつ、めぐりつ、また上る、  
文字もえ讀まぬ山がつや、  
經に酒吹く悪僧や、  
更に寄せ來る討手さへ  
力合はせば力得て、  
筆にえうたぬ一蝶を  
槍に、劔に、禪杖に、  
今ぞ微塵と龍打てば、



水打合ふくろがねに、  
柱碎けて、鐘叫び、  
柘榴朱を打つ蝶の羽、  
一味の者はいかにぞや。  
一味は遂に敗れけり。  
敗れて走るものやある、  
胡蝶の耻を思はずや。  
羽蟻は耻を知らざりき、  
残る胡蝶も散りにけり。  
日の本の耻思はずや。  
皆日の本を離れたり。  
國を離れて國と寄る  
心合はねばちりぐに  
強き風には亂れけり。

太刀は太郎と立ちにけり。

七

姫はうれしとすがりよる、  
胡蝶太郎は聲上げて、  
「出でよ、出でよ、皆出でよ、  
我此の舍を陣とせん。」  
「茲は塵無き精舎ぞや。」  
「精舎ぞ殊にふさはしき、  
名さへをかしき天真の  
山の精舎に旗立てん。」  
「不道の賊の廣言や。」  
道はなれさへ能く知るや。  
女一人もえ救はぬ



道は何の道なりや。  
賊と譏れどながぬしも  
元は奪ひし國ならん、  
奪ひ、奪はれ、幾たびか、  
代り、代りて眞主とは、  
天の笑を聞かざらん、  
天の眞を誰か知る。  
有るを損ねて、無きを益す、  
天の道我爲しつ。  
おのづからなる性に依る、  
天の命我受けつ。  
一切炎いなづまと、  
佛の譬我見せつ。  
我三教を奪ひけり、

果は甲に露そいぐ  
ねざめほのめくともしびの、  
かけは女か、戀人か、  
夢見の尼にわらずやと、  
推して開けば尼ならで、  
昔ながらの黒髪に、  
姫は別れしおもかけや、  
君がいかにと走り寄る、  
袖はふるへど暖き  
涙身に染むうれしさよ、  
君は再び歸らずと、  
秋津島根を去り給ふ  
後はいづくにおはしけん、  
夢も追はれぬうなばらの



果は蝶よりかすかなる  
夢に夢こそ重ねけれ」

「蝶のいくさも夢なりし！  
蝶と消えては唯残る

花の戀路ぞうつゝなる、  
吾故郷は茲なりき」

「さてはまたもや出で、行く」  
「うかれどゝろは極まりて」

「しぐれ晴れたる月の窓」  
「春の昔の夢かへす」

「あはれあやしき香あり、  
袖に牡丹の香あり」

「なれの髪とて誰が爲に、  
切ると告げしはいつはりか」

太郎一人となりけるか、

八

夕霞ゆふがすみ

吉野は夢を籠めにけり、  
洩るゝ色香は妹背山、

流渡りて世の中の  
よしや隔てもよしの川、

翼かはすか水鳥の  
影も暮れ行く筏には

峰の紫載せ兼ねて  
月のしろかね待つやらん、

玉を碎けば朧々と  
月も霞も夜櫻も



共に解け合ふ戀ごるも、  
一重分けても二重、三重、  
奥に奥ある白妙の  
果はいづくに迷ふらん、  
吾戀人は此中か。  
茲は静しづかの舞の跡、  
峰の白雪心無く  
えにし隔てゝまた逢へぬ  
歌の恨を誰か聞く、  
馬うまじしらべは梓弓あやぶま、  
扉残れどまゝならぬ  
辨の内侍もこなたかや、  
夢は歸れどそれもまた  
いくさよばひに破られて、

「今を思うて殘しゝは、  
よそに染むとは恨めしや。」  
「心染まねど旅ごるも、  
解くもまことの戀ならず。」  
「戀は切らずにふるさと、  
斷つはまことの心かは。」  
「心斷ちてもふるさとに  
歸る戀路ぞまことなる。」  
「戀に歸らば元の身の、  
君は小碓こすゑのみこならず。」  
何を咎むと顔見れば、  
一重うすぎぬ霧立ちて、  
「君は我つま狭手彦さてひこか。」  
いよゝあやしき言葉かな



「君は九郎か、十郎か。」

「我は太郎よ、南朝の。」

「君に勤めし左中將？」

「父は勤めて雪に入る。」

「君は誰にか勤めけん。」

「我は吾身を思ふまゝ。」

「人も思はぬつれなさよ。」

「思ふ一人はなれどかし。」

「我を思は、前の世の。」

「人は心になはぬを。」

「それも君の心ぞや。」

「我心こそ我のみよ。」

「さては姿を見給へ」と、

鏡照らせば誰が影ぞ。

我と思へば我ならず、

人と思へば人ならず、

今の我身か、前の身か、

後の心か、いかにぞや。

見ればいよゝゝ月缺けて、

影は分るゝつはものや。

これは伊勢の新九郎、

かれは安藝の毛利かや、

武田、上杉、睨み合ふ、

外に狙ふは誰ならん。

「おはれ一つに世を占めて、

つるぎ細まる春の日や、

君とならびて千代の山

花をかざして暮らさん。」



「國を占めなば波越えて、

更にかなたを襲はんず」

「尙も醒めずや蝶の夢、

花のうつゝに足らずや」と

太刀を隠せば小几帳の

裾はおほるに紋燃えて、

牡丹ものいふ香玉や、

「花は茲にもあるぞかし、

夢と迷ふはうらめしや、

戀のうつゝに足らずや」と

扇取る手を振拂ひ、

「さてはなれこそ異國の

花の姿か、ねたましや、

戀は國の中限る

海の關さへ越ゆるとは、

戀のおきても知らざらん」

「戀におきては無きぞかし、

國のへだても無きぞかし、

心通は、限無き、

思空にも上るらん」

「心かよはす思にも

言葉かよはぬをかしさよ」

「言葉かよはぬ憾には

姿ものいふうれしさよ、

「姿異なるあやしさは、

「いよゝゆかしき思かな」

「思異なる本意無さは、

「戀と調ふいのちかな」



「あないつはりや、そら言や、  
君ぞまことは知るならん、  
定め給へやいづれぞ」と、  
櫻争ふ深見ぐさ、  
花のいくさに迷うては、  
蝶の翼も裂けぬらん、  
戀に迷はなきものを、  
戀に迷ふは戀ならず、  
君は其身を戀ふならん、  
君の心ぞいと薄き、  
蝶の心ぞいと輕き、  
輕き心は花ひらに、  
薄きえにしぞ是非も無き、  
さらばと立ちて行く、

あはれしはし侍てよかし、  
戀を思へば海越えて、  
歸る心は迷はねど、  
牡丹追ひ來る夢見ぐさ、  
夢とうつゝに迷うては、  
蝶はいづれに宿からん、  
かれにとまれば一ひらや、  
これに移れば二ひらや、  
三ひら、五ひら、花落ちて、  
とまる甲斐無きちりしほや、  
十ひら、百ひら、千よろづの  
雪はうつゝと醒めにけり、



沙原や、沙原や、

沙原の果はいかにぞや。

山盡きぬ、河盡きぬ、

里も盡きたる沙原の、

果無き果はいかにぞや。

雪永劫の世を占めて、

月も日かげも灰となり、

花も草木も塵となり、

石も霞となるやらん、

風しろかねの劔ふり、

馬のたて髪さかだてば、

鶉も翼をむしられて、

燕も翼を望み行く。

胡笳はいづくに起るらん、

遠く、遠く、また近く、

近く、近く、また遙

止むか、消ゆるか、跡ふるふ

響返して落つる雁、

それもふるひつ、またかすか、

我に従ふものは誰ぞ、

跡も吹雪に埋もれけり、

我に伴ふものは誰ぞ、

馬も吹雪に倒れけり、

馬を下れば足を刺す

雪に埋もるゝ骨無さか、

誰の骨とて厭ふまじ、

骨を抱きて友とせん。



骨を探れど石氷る。

地には我のみ歩むなり。  
天を仰げど星も無き。

世には我のみ迷ふなり。  
我のみか、我のみか、

あめつちの中我のみか。  
我のみにてもなど足らぬ。  
我あめつちのあるじぞや。

誰か吾世を襲ふらん、  
何か我身に叛くらん、

力尙抜く山無さか、  
意氣尙掩ふ世はいかに。

雪は面を打ちにけり。  
げに並は雪の世か、

雪と此世を争はん、

雪は小袖に靡くなり。

雪もなさけを知るならば、

共に今宵は眠らん、

あな冷の心かな。

我は炎に世を焼きて、

烟消えても尙残る、

心ひとつをいかにせん、

行くも果無く、歸るにも

此身ひとつをいかにせん、

吾ふるさとはいづくぞや、

まことの國はいづくぞや、

天の上に國ありや、

國の外に我ありや、



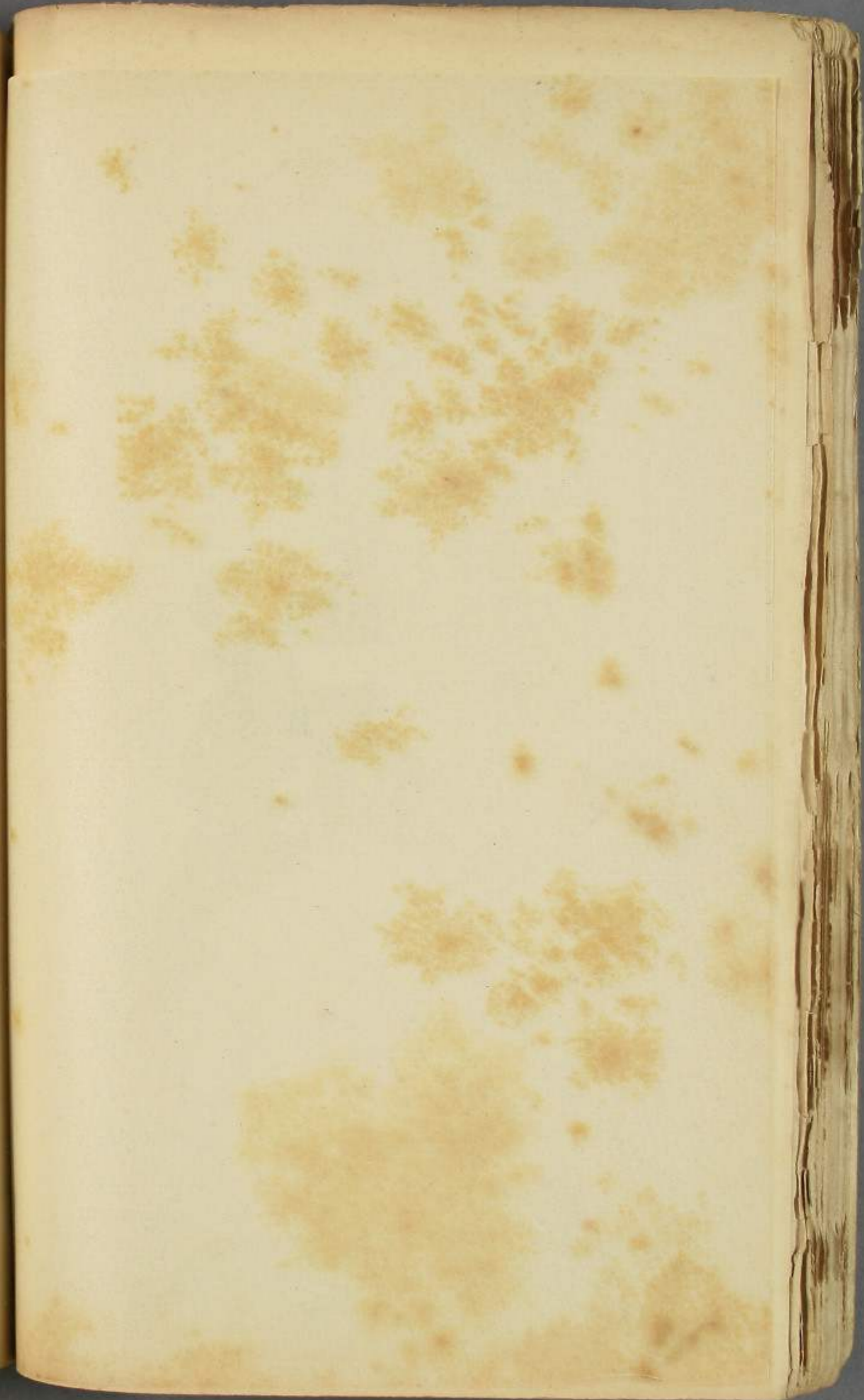
我の中に人ありや、  
人の中に我ありや、  
我の前に我ありや、  
我の後に我ありや、  
我の上に我ありや、  
我の下に我ありや、  
我は獨り我なりや、  
我も人も皆無しや、  
我や人や、天や地や、  
月や心や日やいのち？  
雪や——其身は氷りけり。  
花や——其息絶えにけり。  
戀や、いのちや、いかにぞや、  
夢や胡蝶や、いかにぞや——

叙  
情  
詩











花 賣

一

けさはうれしや鶏トリより先まへに、  
里さとを出て行きや雲雀ムスズビもまだか。  
山は朝霧あさぎり、日はやうくと  
載のせた重荷おもいの露照つらす。

重荷載のせても花ならよかる、  
花のかんざし、小露こつゆの玉や。  
蝶ちょうもうかゝ町まちまで来れば、  
京きやうの娘はまだ醒さめぬ。



花は入らぬか、入らぬか桃は、  
雛の節句もあしたか、けふか。  
わしは御殿もほしうはないが、  
人形一つは抱きたい。

京の娘は友禪重ね、  
花見、遊山と化粧に暮らす、  
わしは花賣り山家に暮らす、  
せめて土産に紅ほしや。

紅もつけぬがわしには似合ふ。  
賣れぬ花でもわたまへ載せて、  
山へ歸るを呼ぶのは花か。  
花も、姿も寫すとは。

姿はづかし紺地の木綿、  
帯も淺黄や、赤いは襷、  
白い脚半につかぬか塵は、  
吹くも春風二里の路。

二

けさはうれしや鶯鳴て、  
里を出て行きや燕もかける。  
吉田通れば降る春雨に、  
載せた重荷の花濡らす。

花は濡れても身は濡れぬ、  
梅の花笠、柳の簀や。



蝶を入れても浮名は立たぬ、  
京の娘は何こわい。

花は入らぬか、入らぬか櫻  
嵯峨の櫻も雨にはなやむ。  
花の心はわしこそ語る、  
心聞きたきや一枝を。

花のたよりか、またわしの身か。  
雨の姿は尙はづかしや。  
書にもかくなら花だけ寫し、  
わしは手拭顔隠す。

隠す手拭吹く春風の、

憎くや書筆にるくほも書て、  
頬に紅さし花、紫の  
濡れた姿は誰が姿。  
をかし、美しく、書姿出来た。  
わしの顔より書姿かはい。  
わしもかはいとなぶるは厭ぢや、  
わしは山路のすみれぐさ。

三

けさはかなしや人より遅う、  
里を出て行きや鳴くほととぎす。  
春は過ぎたか、かたみの色香  
載せた重荷は尙重い。



載せた重荷に此身も瘦せて、  
姉に問はれて花よと云へば、  
花のしづくか、涙の露か。  
京の娘に何習た。

花は入らぬか、入らぬか姿  
花の書姿よろづの人に  
見られ、ほめられ、もてはやされて、  
わしの姿は誰も見ぬ。

さまは今頃何寫してぞ。  
御所の姫君、祇園の舞子、  
長い振袖、友禪重ぬ、  
花見、遊山に行く所。

長い振袖一しほかはい、  
花見姿は賣るよりよかる。  
わしは手拭顔隠しても、  
花のしづくの口濡らす。

花のしづくか、涙の露か、  
京の娘に何習はねど、  
花の書姿、心も取られ、  
花も入らぬよ、身も入らぬ。



妻あらそひ

秋山の下木男

いづしをとめよ聞き給へ、  
いましを見しは夏山の  
雲の司も日に酔ひて、  
顔れかゝれる時なりき。  
縁息つく谷の戸に  
何をさゝやくいさら川  
水の秘言聞かばやと、  
しげみ分くればあな妍や、  
玉の花びら集めては、  
遊の衣纏る白蓮か。

そのの香よりは微なる  
息に常世の命洩れ、  
頬をついばむ月草に  
笑むはいかなる夢や見て、  
爪に紅さす撫子の  
泣くにいつまで醒めざらん。  
あゝとかこてば翠鳥の  
瑠璃を流して行く影に、  
半開きてゆふづゝの  
光り、また止むまなざしや、  
止みて、また照るおもかげは、  
残る日かけか、吾影か。  
あはれしるかね消えにけり。  
我は緑に顔ひけり。



いづしをとめよ聞き給へ、  
いましを見しは冬山の  
雪のしら姫胸解けて、  
歳を通せし時なりき。  
空も淺黄に笑みそめて、  
海を挑めば波も笑む。  
岩の細螺拾はんと、  
汀たどればあな妍や。  
神の御門もけふ明けて、  
八の衢にかよふらん、  
境知られぬ味御路、  
無間勝間の舟浮けて、

香木棹さす波の穂に、  
己が胸見る白鳥か。  
その羽より滑の  
身には情の満潮や。  
鶴の尾よりも長く引く  
髪の幾筋そよ風に、  
口をさそひて歌となる  
聲は月かけ弾くやらん。  
我も合はせばほゝるみて、  
險はぢらふ紅は  
東御空の夕映や。  
我は紫溶けにけり。



秋

いづしをとめよ聞き給へ、  
いまし見てより風となり、  
萩に計れば露と云ふ、  
身はうきものと知りにけり、  
星の通ひ路眺めては、  
虫の草笛吹けばとて、  
しらべ合はさぬかりがねは  
それて狭霧にまぎれ入り、  
月もなやむか青摺の  
衣かつきてものおもふ、  
八十の神さへかなはぬか、  
弟しかなはる菊の酒

春

身高量りて藝にかみ、  
甘菜、辛菜も、廣ものも、  
鱈の狭ものも、興津藻も、  
もみぢ飾りてつぐのはん、  
それも氷雨となりけるか、  
戀は色ある涙かな

いづしをとめよ見給へや、  
いまし見てより遊絲の  
野邊を迷へば草も笑む、  
身のうれしさを知りにけり、  
花の色糸撰びては  
迦爾波櫻を衣に織り、



玉の柳を輝とし、  
杏は山吹、機は  
緋桃、幾重に縫ひ合はせ、  
心射ばやと弓矢まで  
添へて掛くれば紫や、  
中にもほへる文垣に、  
立てば先づ立つ胸の波、  
いましの胸に通ひては、  
夢もおぼろの月落ちて、  
花の衣に醒めよかし、  
それも藤とぞなりけるよ、  
戀は命のかざしかな。

秋

霞をとこの妬ましや、  
藤にいろどる戀衣、  
いづしをとめの目を奪ひ、  
裾のおぼろにまぎれては、  
闇に従ふ春の蝶、  
いづしをとめの夢亂し、  
戀のひめ矢に雉子より  
糸にし射たるぞ妬ましき、  
吹けや、吹けや、夜嵐に  
花の衣吹き破れ、  
柳の輝吹き亂せ、  
藤の糸房吹き切れや、  
戀の弓矢吹き折れや、  
闇の霞吹き散らせ、



戀は花にかなふとも、  
幸は短かき花の夢、  
罪はをろちの身をまとひ、  
果は黄泉路に落ちよかし。

春

下水をとこのおそろしや、  
おのがかなはぬ戀風に、  
他の重ねし花衣、  
裏をかへしてつくのはず、  
戀のたくみは神ならひ、  
結ぶ誠に免されん、  
契たがふは青人の  
草の習か淺ましや、

助け給へや御祖君、  
伊豆志河の竹編みて、  
荒籠に石と鹽とあへ、  
竹の青葉に包めよや、  
竹の青葉の青む如、  
鹽の流の盈つる如、  
石の汚の解くる如、  
解けよ、盈てよ、青めよや、  
釜の烟に花蒸して、  
しばし小春と笑めよかし。

秋

いづしをとめはいづくぞや、  
釜の烟にいと尙



菊の齡も縮みけり、  
もみぢの榮もちりにけり。  
しぐれすゝれど骨冷へて、  
尾花枯れ臥す霜の床、  
色を思へば雪となり、  
花にこゝへて千鳥泣く。  
うきは此世の定かや、  
定常世の継かや、  
定糸くる御祖こそ  
情知らぬか、恨めしや。  
あはれ黄泉比良阪や、  
苦も氷れる千引石  
裂けて斜に闇に入り、  
底は千ひるか霧こめて、

淵に知られぬ渦鳴るは、  
あはれ八のいかづちか。  
骨に水さす魚の香を  
吹きて寄り来る影の身は  
波に髪解く枯柳、  
あはれ泉津醜女かや。  
あはれ淵に引かれ行く、  
あはれ、あはれ、闇に入る！

春

いづしをとめよいかにぞや、  
藤の衣の身を染めて、  
いましも藤となりけり、  
我は緑となりにけり。



色を合はせば紅くわにの  
實みは常夏じょうかとなりけり。  
戀こひは天あめの詔琴のりこか。  
調常世しらべこよを和やほぐる  
戀こひの曲編まがらむ御祖みむすこそ  
情餘こころあまれる尊みこととさや。  
あはれ虹にじの橋はし浮うきぬ。  
錦にしき組みたるおばしまに  
こがねこぼして朝あさひこの  
宮みやを出でて來きる跡あとに引ひく  
音ねも調しらべふ長橋ながはしは  
それも六むの緒張いとぢるやらん。  
桂かきかざして神集かみづみ  
星ほしの花はな蒔まく戯たはれ

露つゆと散ちりては珠たまと疑あやむ。  
砂子すなご盡つきせぬ銀ぎんの河が。  
原はらを縫ぬひ行く羽衣はねえは  
そよや天あめの使つかかや。  
そよや花はなの衣更えさらへ、  
共に、共に、御空みそらまで！

晝の夢

薔薇ばらはなさく陰かげに臥ふして、  
詩うたを枕まくらに仰うぎ見みれば、  
詩うたの心こころは花はなに入いりて、  
笑わらひよ花はなびら、笑わらひよ、笑わらひよ、



笑みて、笑みて、詩となるよ

薔薇ほゝるむ陰に臥して、

詩を懐きて睡り見れば、

花の姿は夢に入りて、

舞ふよをとめの、舞ふよ、舞ふよ、

舞ひて、舞ひて、戀となるよ。

をとめ舞ひ舞ふ袖にふれて、

戀を歌ひつ我も舞へば、

夢の心は姿ぬけて、

散るよもろとも、散るよ、散るよ、

散りて、散りて、花となるよ。

### 花の涙

むらさめ晴れし夕暮、

うしろの園を覗けば、

入日に木の葉笑む中、

薔薇の目には涙か。

さのふは姉を摘まれたつ、

けふは妹を摘まれたつ、

翌は其身や摘まれん、

薔薇の月には涙よ。

薔薇の色はさめねど、



かざす甲斐無きゆめひと、  
隣にありて應へず、  
をとめの目には涙や。

夢のまこと

雲雀につれてみ空に  
登ると夢に見たりき。  
醒むれば低きくさむら、  
雲雀の聲はみ空に。

戀ひしき人の手を執り、  
語ると夢に見たりき。

醒むれば遠く離れて、  
戀ひしき人はふるさと。

醒むるに早きうれしさ、  
過ぐるに遅きつらさに、  
まさる夢こそまことや、  
うつゝばかりのいのちか！

木蓮の一ひら

紫の一ひら、  
誰か書く戀の字。  
白妙の一ひら、



我書きぬ死の字を  
夜嵐は吹きたり、  
残れるは一ひら、  
白妙は皆散り、  
戀の字の一ひら、

芭蕉の葉

詩興起るに任せて、  
一筆墨を含ませ、  
芭蕉のそり葉寄すれば、  
あはれ風に裂けたり。

きのふの一句變へんと、  
細筆朱を染めつゝ、  
芭蕉の破葉探れば、  
あはれ雨に消されて。

文字無き書を読まんと、  
薄雲垂るも厭はで、  
芭蕉の卷葉開けば、  
あはれ月の痕あり。

絃無き琴を聴く中、  
玉の間に止むに、  
芭蕉の廣葉覗けば、  
あはれ露のまろびて。



羅浮仙女の嘆

青邱の君は斬られけり。

禁園の春夢閉ぢて、

琵琶も洩らさぬ宮人の

かんばせ誰か伺はん。

蘭燈のかけ稍動き、

照るは衣か水晶の

簾に色そふくれなるや

王は早くも臥しにけん、

鸚鵡も睡るおぼる夜の

月に心やあこがれし

花をわけては花に入る

花の香ぞなど高き

小犬は何を答むらん

誰も入られぬ深閨の

中を覗くは君ならず。

小犬は誰に吠えにけん。

青邱の君は斬られけり。

吾園の春夢過ぎて、

雪のなごりは露となり、

霞は鎖す月の戀

風はいづくにさそふらん

我は行かねど香のみ

飛べば飛び来るうぐひすや

なれも歌へど心無き



聲は濕ふ雨の糸、

蝶を縫ひてはまた解きて、

水に放てば綾亂す

影は翼か、花びらか、

夕日の光ときめけど、

誰に許さん色も香も、

なさけも知るも君のみぞ

君は再び還らぬか

青邱の君は斬られけり

五雲の閣に生まれても

餘るなさけに落とされて、

世に住めば身は瘦せつ、

瘦せても歌ふ聲絶えて、

こがね求めず、名も獵らず

戀もあざらぬ心には

誰の面影刻みけん、

ものに狂ふと人云へば、

獨り笑み、ひとりどつ、

心を誰か解くやらん、

詩さへえとかぬ都には

戀に、こがねに、名に競ふ、

塵は立ち舞ふたかどのや、

奥を探るも甲斐無きに、

君は何とて覗きけん、

青邱の君は斬られけり

あはれ散り行く一ひらや、



二つ三つ四つ跡追ふは、  
吾いのちさへ迫りけん。  
水は千里に流るれど、  
春老いつ、空さびつ、  
霞もむせぶおほる夜の  
愁を誰か慰めん。  
三更の鐘はかなくも  
詩をくちすさむ聲消して  
曉の風ひやゝかに  
琴の糸切るつれなさよ。  
今は残りて風に病み、  
雨になやむも甲斐ぞ無き。  
またも散り行く一ひらや、  
吾片袖も切られけり。

青郎の君は斬られけり。

吾片袖も切られけり、  
涙に朽つる片袖に、  
色衰ふる吾肌や。  
あはれ夢さへ還らぬを、  
夢と近づく影は誰ぞ。  
竹を過ぎては緑泣き、  
水を渡れば玉むせび、  
月も堪えでや青ざめて、  
雲の喪に入る夜の空。  
苔の烟の裾まとふ  
姿は何の姿ぞや。  
君の跡追ふ人やらん。



君の心は獨り知る  
我の外には無きものを、  
あはれ君こそ來ましけれ。

青邱の君は來ましけり。

うれしやな、悲しやな、  
塵は君さへ捕へしと  
聞けば、妾も斬られしに、  
塵を拂うていと清き  
君の姿のうれしやな。  
君は何とてものいはぬ、  
妾の姿變りしか。  
變る姿も君の爲、  
瘦せし身を風殺ぎて、

迫るいのちの悲しやな  
そよやいのちは君も亦  
限りある世を離れしに  
我も離れてもろともに、  
君と手を取りさまよはん  
青邱も亦家ならず。

青邱も亦名にあらず。

今こそ春のなごりぞや  
君の詩を歌はんに、  
長笛を吹き給へ。

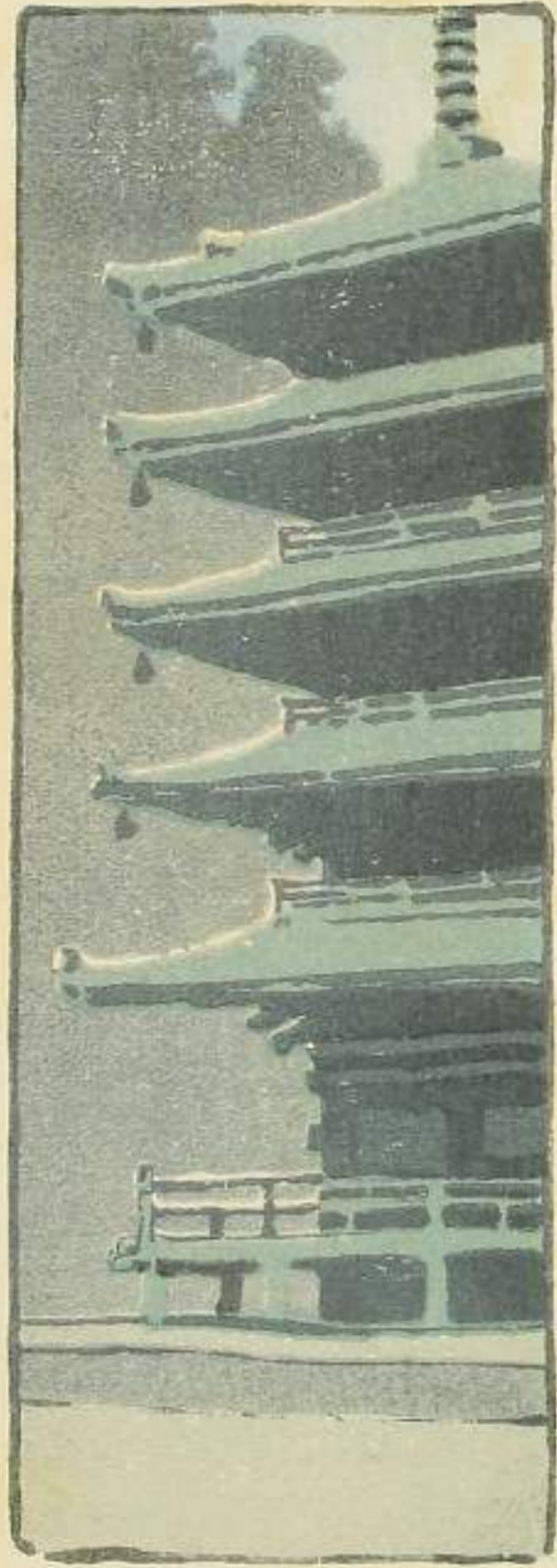
波立つも、風吹くもよし、世の中は  
龍と虎とに任すべし。  
あまつみかどの怒りなば、





玉の宮にも還るまじ  
鶴の翼を借らずとも  
雪と舞ひ行く大空の  
果も無きこそをかしけれ  
限無きこそをかしけれ  
いさや來給へ、蝶も醒む  
紅の光さぬまに、  
紫の雲に昇らばや、  
しろかねの霧を渡らばや、





玉の宮にも遠るを  
鶴の翼を借らすとも  
雪と舞ひ行く大空の  
果も無きこそをかしけれ  
限無きこそをかしけれ  
いざや來給へ、蝶も醒む  
紅の光さゝぬまは  
紫の雲に昇らばや  
しろかねの霧を渡らばや



醍醐賦

薄田泣菫君に

一昨年の秋、泣菫君と深草に遊びぬ。石峰寺に若冲が石刻の五百羅漢を撫で、元政菴に主人が三竿の竹碑を叩き、更に菴後の一徑を行けば、竹樹漸やく深くして唐詩の趣あり。只恐る愈密となりて徑將に盡さんとするを、すなはち木を伐つ者に問へば、徑遂に窮まりて溪に落つべしといふ。一笑して返し、更に桃山へ行くべきか、將又醍醐へ行くべきか、いづれか近きと問へば、人我等が餘りに迂なるを愚弄して、醍醐の方近しといふなり。我等は時に愚弄と知らず、更にものがたり行きて遠きをも知らず。山門に到れば日暮れたり。鐘樓の下に立つ事多時、歸りて後此賦成りぬ。これを人に語れば皆笑ふ、されど愚弄せられたる故に醍醐へ行きたるなり。醍醐へ行きたる故に日暮れたるなり。醍醐に日暮れたる故に此賦成りたるなり。桃山へ行かば、知らず、何となりたらんを、あゝかしくも亦猿郎の跡か。

明治乙巳仲秋



日は解けぬ。  
くれなるの雲は灰となり、  
むらさき重き山々は  
夕の秋に沈むらん、  
山門の内、影落ちて、  
千年の杉先づ夢み、  
木の間に餘す一點の  
光は何のまぼろしぞ  
鐘樓の下に我立てば、  
頭上に起る天風に  
聲打添ゆる小笹原、  
秘密の經や唱ふらん、  
三寶と呼ぶ鳥なきか。  
醍醐の水はいづくぞ。

醍醐の水はいづくぞや  
落葉叩けど露あらず、  
永劫の地も死は食みて、  
死より生るゝ鬼も無く、  
佛鎖すか金堂の  
扉叩けば昔の香や、  
神女塔にも降らぬか、  
星は飛べども地に落ちず、  
龍の影だに過ぎよかし、  
雲怒るとも厭はねば、  
空のわなたを探らばや、  
醍醐の水はいづくぞ。



醍醐の水はいづくぞや  
花見の山ぞおなたなる  
花見の人はいかにぞや  
花見の春は回らずや  
我は常世に遊ぶ身の  
時の隔てをいざ除けん  
花見の幕を描きては  
途を挟みし屏風こそ  
夜の幕にも代へよかし  
花を護りし鈴や無き  
花をついばむ鳥逐うて  
花と競ひし人呼べや  
醍醐の春はいづくぞ  
美しき人はいづくぞ

美しき人はいづくぞや  
星見えつ月見えつ  
星を染むれば花咲きつ  
月をゑどれば人笑みつ  
くれなるの袖匂ひ  
むらさきの裾おぼろ  
雲も五色の幕わけて  
一の君は政所  
西の丸、松の丸  
三の丸も後れず  
加賀殿と手を引きて  
東の方も出でたり  
局々も皆出で、



籠もる姿、花を縫ひ、  
 積もる思春を吹き、  
 花は一重、七重、八重、  
 花色々の花添ゆる  
 醍醐の春ぞ美しき  
 美しき人にすゝめん、  
 美しき酒はいづくぞ

美しき酒はいづくぞや  
 美しき人春を酌む  
 江門酒は博多より、  
 菊の酒は加賀より、  
 僧坊酒は奈良よりか、  
 伊丹、尾の道いづれぞや

盃に花浮けて、  
 共に吸へば満ち渡る  
 花か、人か、酒の香か、  
 君も過ごせや、春どかし  
 顔は燃ゆとも、花も燃ゆ、  
 花と酔はずば、花忌まん、  
 酔うて渴かば、いさ茲に  
 花の日かけを稍避けて、  
 松の緑の露染むる、  
 茅屋は誰の好ぞや  
 王義之の筆、貫之の  
 歌も花や詠じはん、  
 木の下風に稍動く、  
 畑も花や香ふらん、



器は高麗の宮に獲し、  
壺も呂宋の貢なる、  
獅子の香爐、猿の釜、  
ひさごの銘は大吉や、  
箱の蒔繪も大文字や、  
三の寶ばかりかは  
よろづの寶皆寄せつ、  
いづれなりとも召し給へ、  
かはりは太刀と國、郡、  
よろづの骨を枯らしける  
さまをわやつる人形の  
聲は誰を學ぶらん、

太閤殿はいづくぞ

太閤殿はいづくぞや、  
髯は添へても、つやもなき  
髪にこがねの冠や、  
眉はつくれど、色黒き  
額に染みし汐風は  
錦の袖に入るやらん、  
くめども酔はぬ菊の酒、  
大明の酒まだ來ずや、  
秋津島の酒皆吸ひつ、  
花のかんばせ皆寄せつ、  
聚樂と呼べど尙足らぬ  
醍醐の春のさびしさよ、  
萬里の城を幕として、  
大明の花見せん、



牡丹と櫻いづれぞや  
花のいくさに誰か勝つ  
葡萄の酒に船浮べ、  
玉の盃散らさばや、  
大明の春はいづくぞ、

萬里の果はいづくぞ、

萬里の果はいづくぞや、  
三千の世を握りなば、  
地獄を誰に與ふべき、  
曾呂利は何を笑ふぞや、  
なれにも貴妃を與へんに、  
尙極樂を望むかや、  
極樂は人の世に

活きて甲斐ある心ぞや

八郎の矢は鏡さも

僅に落とす龍の球

九郎は躍る海原の

わなた占めしはそらごとや

兄は動かぬ富士がねの

裾野の獵の小さゝよ

日かげ留めても波に入る

一族留めぬ淨海に

王と呼ばれて膝を折る

恭獻の骨や無き

我に似たるは誰やらん

活きて甲斐ある者はいづくぞ



活きて甲斐ある者はいつくぞや  
花散るか、人散るか、  
一ひら散れば春も散る、  
十ひら、百ひら、千よろづの  
人も、家も、國も、皆散るか  
大明の酒途に來ず、  
萬里の果に吹き渡る  
世の秋風を骨に染む  
秋風を拂へよや、  
秋風は吹けばとて、  
一たび春を咲かせつる  
木の實は人に拾はさん  
冬は枯るともまた返る  
春は此世の心をや、

此世の心占めたり  
常代の思占めたり、  
何か泣く、何か泣く、  
美しき人また泣くか、  
つはものども、何か泣く、  
利休も泣くか、山樂も、  
曾呂利も泣て笑ふかや、  
江戸の亞相ぞ獨り笑む  
笑へよや、笑へよや、  
昔思うて笑へよや、  
今を思うて笑へよや、  
翌を思うて笑へよや、  
泣けばいよゝ美しき  
花の涙ぞをかしやな、



涙玉なす花衣  
僧に著せなばをかしやな  
墨の衣を我まとひ  
夢を説きなばをかしやな  
をかしやな、をかしやな  
我もをかし、世もをかし  
賤の伏屋に生れ出で  
よろづのいくさ中過ぎて  
こがねの殿に今住めば  
那落の底に翌行かん  
地獄の王の冠剥ぎ  
鬼、獄卒を叱咤して  
天上の宮襲はれや  
諸天諸魔の王たらん

百萬億のきざはしに  
百萬億のたかどのや  
百萬億の寶網に  
百萬億の寶帳や  
華帳、香帳、鈴帳に  
栴檀の帳、瑠璃の帳  
こがねに垂るゝはなかつら  
錦に垂るゝ瓔珞に  
香ふは塗香、熏香か  
沈水の香、最勝香  
香焰めぐる日月の  
光明の雲、樂の雲  
香樹の雲に、樓閣の  
雲に雲巻く花の雲



天上の花見せん、  
天人の舞眺めばや。  
鬼も舞へ、夜及も舞へ、  
魔は天螺吹け、天鼓打て、  
菩薩の笛に聲合はせ、  
我も如意樂かなでばや。  
あはれ先づ吾手清めん、  
醍醐の水はいづくぞ。

親不知

波寄るか、波寄るか、  
波寄らぬまに渡れ、北の海荒し。

親知らず、子知らず。

北の海荒きに、波寄する磯邊、  
波を枕に眠るは親あるか、子あるか。  
北の風烈しく石も飛ぶ板屋、  
風を衾に暮らすは親もあり、子もあり。  
風吹くも、波立つも出つ北の海に、  
一葉散る小舟何かあざる。  
戀ならず、名ならず、こがねならず、  
世を凌ぐいのち、親と子の爲。  
同じ世をかざる花や、もみぢや、  
眺めては遊ぶ人もありけり。



花もみぢ茲は影もあら磯、  
うしろ山立ちて日かげさへ薄し。

さすらふは誰ぞ、何の罪ある。  
人責めねど住むは住みや習へる。  
人多き所住めばいとゞ波立つ、  
罪無くて暮らせば茲も安きか。

風吹くよ、波立つよ、雨も亦添ふ、  
山を落つる水飛で瀧は幾筋。  
瀧の下くゞり、波のまを行く、  
世もかくや、親知らず、子知らず。

いざり舟いづくぞ、海は暗し、

空暗く、またあかく、霧は迷ふ、  
岩砕け散れば石は霰よ。  
いざり舟いづくぞ、未だ歸らず。

親は稍病みつ、子は飢ゑつ、  
波立つも行かずば、いのち苦し。  
波遠く出づれば風に雨そふ。  
いざり舟いづくぞ、未だ歸らず。

親は床を出で、子は手を取り、  
いざり舟いづくと汀さまよふ。  
瀧は頭打ち、波は袖打つ。  
親は子と呼べば、子は親を呼ぶ。



海はいよ、暗く、波は濁り、  
山も碎くるか、雨は劈く、  
あはれ岩落つ、波躍る、  
親は子を知らず、子も知らず。

空稍あかくなれば、波も白し、  
いざり舟歸れば、親はあらず、  
風稍弱くなれば雨も止みつ、  
筈屋あけて呼べど、子もあらず。

波引くか、波引くか、

波引かぬまに探れ、北の海荒し。

親はいつく、子はいつく、

姨捨山

ねたましや、ねたましや、  
名さへ木の花咲くや姫とは、  
花を其身に占めん心か、  
梅に櫻に花はさま、  
萩に桔梗に草も花さく、  
など妾のみ醜みにくき。

うらめしや、うらめしや、  
われも同じ姫と生れて、  
なさけばかりは人に劣らず。



春の風過ぐ四十路餘り、  
月のおぼろを獨りかこつ。  
など妾のみ醜くき。

腹立ちや、腹立ちや、

月のおぼろに花とさゝめき、  
春の雨洩る闇の火かけ。  
なさけかへせば思甲斐あり、  
獨り思へばなさけ身を焼く。  
など妾のみ醜くき。

あな憎くや、あな憎くや、  
花はみのりて兒もいくばく、  
いづも賑はふ家の樂しさ。

かはるゝに木の芽はななさき、  
春は常世に行きて離れず。  
など妾のみ醜くき。

さびしやな、さびしやな、  
春も吾家は秋の風吹く、  
秋の山こそまさる家なれ。  
石を抱けば苔もひやゝか、  
踏みて登れば日さへ暮るゝか。  
など妾のみさびしき。

かなしやな、かなしやな、  
日かげ暮へど山の色さめ、  
烟こめ行く水もつや無し。



花も、實も散る山の木がらし、  
水に流るか果も見えず。

わゝ妻よりかなしや。

わはれやな、あはれやな、

里の火かけはあるか、あらぬか、

稲は刈りても水田くもりつ、

秋の雨聴く窓は破れて、

過ぎしなさけに涙しぼらん。

わゝ妻よりわはれや。

すゝしやな、すゝしやな、

秋の月こそ山に出でたれ、

水も光れば、田毎かけあり、

月はいくつぞ、空にひとつか、

ひとつ光りて、田毎光るか。

わゝ妻さへ光るよ。

うれしやな、うれしやな、

妻の姿光りかゝやく、

花より、實より、光かゝやく、

かけはひとつか、田毎うつるか。

わゝ妻さへ美しくし。

美しくしや、美しくしや、

大山姫とは吾身よしなし、

光心にいざや占めなん、

醜くき骸を山に捨つれば、



姥を思は、田毎眺めよ。

あゝ妾こそかゝやけ。

### 桔梗原

わかつき鹽尻の里を出づれば、  
霜に入る古道一すぢ白し。

霧も尙迷ふ桔梗が原、

山のみ稍さめて花の色あり。

風はいづくよりぞ面劈き、

駒もなやめるか遠くいなく、  
つまづけば立つは鳴か、鶉か、

見かへれど影無し、我ぞひとり、

傳へ聞くむかしいくさありしと。

勝ちたるは何者、敗れしは誰ぞ。

問はんにも人無し、知るも甲斐無し、

勝ちたるも骨ぞや、敗れしも骨。

骨あれば戦ふ、戦へば骨、

亡き魂はいづくぞ、それも戦ふ。

戦は茲も、山も、都も、

戦ふて進むか、何か安き。

あめつちはあはれ殺氣満ちたり、  
木の葉さへ血に染む霜の鋭どさ。



霧も晴れ行けば鷺のあさるよ、  
草に臥す小鳥か、人のかばねか。

見渡せば山々いよ、迫りつ、  
うまやあるもさびて煙寒し。  
漸くに日かけ石を磨けど、  
馬を洗ふ泉落葉洗はず。

### 飛雲辭

「不思議や峨々たる石根にく、  
曇一むら起ると見えしが谷峰一  
同に響き震動し盤石を碎き木を

折る嵐に先立ち飛ぶ雲の光の中  
に現はれ出づる鬼神の姿面をむ  
くべきやうぞなき」 謡曲

秋深けぬ、秋深けぬ、

木曾の山路は秋深けぬ。

天にひめたる筆盗み、

二十一里をゑどらん。

霜ふれや、雪まけや、

御嶽の頭先づ染めて、

常世がほなるよそほひに、

駒草残せ裾模様、

墨は落ちてもおのづから

深山鳥と袖めぐる

三むれの山は色まじへ、



まだらに鹿の子着せばやな。  
 山吹山は神の子の  
 思黄ばみて落つるかや。  
 落ちて流れず尙ゆるる  
 巴が淵の深緑、  
 鳥居峠のくれなるは  
 立田姫の臥戸ぞや。  
 臥戸設けて尙來ずば、  
 駒が嶽の神馬驅り、  
 錦のしとね踏み行かん。  
 馬籠峠に隠るゝか、  
 あげるの山の姥いかに、  
 問へど答へぬ山めぐり、  
 めぐりめぐるやかけはしを

いで斧振りて碎かなん  
 小野の瀧などふるふ、  
 そも天の河落とさばや。  
 ねさめの床にやすらへば、  
 龍姫の使など遅き。  
 山に飽かねどわだつみの  
 底の色にも染まりたや。  
 先づ烏帽子岩いたゞきて、  
 象岩にまたがり、  
 大釜に、小釜に、  
 白き石煮て待たん。  
 水の面など白き、  
 楓ちぎりて朱を打たん。  
 打てども解けず尙白き



水は誰のたくみぞや。  
 二つ打て、三つ打て、  
 四つ、五つ、七つ、千よろづの  
 山の木の葉皆打てや。  
 飛ぶよ飛ぶよ、くれなるの  
 雪は山より空に飛び、  
 羽は空より溪に散り、  
 桂男妬む山姫が  
 うはなりうちか天地の  
 いさかひ解けぬ秋風や。  
 はては分れてまた笑ふ、  
 山紅に、水白き、  
 二十一里のをかしさや。

秋深けぬ、秋深けぬ、

木曾のうまやは秋深けぬ、  
 人の忘れし笛取りて、

二十一里に吹かばや。

風も吹く、雨も鳴る、

板屋の石も鳴るやらん、

霞洩りても月たまる

苔は幾代のかたみぞや、

軒のしのぶも日に焦がれ、

思盡さても身を晒す

下に白けし家の名の

文字も塵にや磨られけん。

籠の樞鳥習ひ讀む

経はあるじか、巡禮か、



厨黒みしはたこやの  
奥に煙も打ちしめる  
中に燕も宿らすや、  
雞は泊らぬ時知らせ、  
店にひさげる小鳥さへ、  
いつの春にか打たれけん  
花は漬けても色さめて、  
けづる甲斐無きお六楯、  
姉も妹も馬追ふは、  
けふもいくたび阪越えて、  
落葉かざしつ歌うたふ、  
馴れし小路もさびしきか。  
弟に語るな駒王の  
跡に花のむ白露は

巴、山吹、夢に泣く  
夜半の涙とよも知らじ。  
鄙のつらさを引けばとて、  
乗るも都のわび人や、  
しらべ合はせよ兼平の  
謠うたふも聲さびて、  
何に瘦せけん名も知れぬ  
うき身風刺す薄衣、  
吹けや、吹けや、夜も深けつ、  
鶯の木蔭に笛吹けば、  
またも時雨の忍び音に、  
獨り泣くらん旅の子や、  
溪のあなたに笛吹けば、  
けふもねさめのをとっひの



涙憚かるともしびに、  
砧かへせば我も泣く。  
人わびつ里荒れつ、  
二十一里のさびしさや。

秋深けぬ、秋深けぬ、

木曾の山路は秋深けぬ、  
木曾のうまやは秋深けぬ。  
天くれなるに、人さびつ、  
二十一里のをかしさや、  
二十一里のあはれさや。

### 新盧遮那佛賦

春の日こがねに奈良を描く  
夕暮まばゆき東大寺に、  
われ盧遮那佛を仰ぎ見れば、  
あゝ大なるかな、いかめしさかな。  
三千世界を膝に載せて、  
百萬億劫指に拈る、  
大悲の眼は茲に開き、  
十歳のいとなみ成りし時や、  
よろづの法の師寄りつ、寄りつ、  
百千の司並び、並び、



みかども、神のつかはしめも、  
青人草もつどひ、つどひ、  
白きは其身の影を洗ひ、  
黒きは心の炎消して、  
赤きは思の夢を焼きて、  
紫迷の烟散らし、  
色はさまざま、染めし衣  
光あまねくこがねさせば、  
衣色々こがね染みて、  
こがね色々かへす袖に、  
こがねの鼓老を打てば、  
こがねの笙の音病吹きて、  
こがねの笛の音黄泉を離し、  
こがねの琴の音苦患拂ひ、

日かげも同じくこがねさせば、  
天地あまねくこがね浴びて、  
常代もこがねの色に編まれ、  
月もしろかね涙照らしぬ、

こがねの色は百代縫ひて、  
千歳の半も編まぬ先に、  
大悲の眼は茲に閉ぢて、  
常代の臺も焼くは誰ぞや、  
よろづのつはもの寄せつ、寄せつ、  
よろづの法の師防ぎ、防ぎ、  
阿修羅も、夜及も、乾闥婆も、  
牛鬼、馬鬼、おめき、叫び、  
いくさの鼓は我慢鳴らし、



関の聲は邪欲上げて、  
打ち合ふ及は無惨競ひ、  
夜攻の炎は地獄開き、  
血に染む扉は朱に燃えて、  
烟の廻廊、渦と廻り、  
炎嘗め行く柱、棟木、  
炎の琉璃燈、魂と落ちて、  
炎の幢幡、鳥と飛びて、  
炎の經切、蝶と舞ひて、  
炎の花さく大紅蓮、  
大焦熱に四天咽び、  
こがねの涙に脇士解けて、  
あなや佛の膝に這へば、  
こがねの龍巻く衣煮えて、

いなづま逆立ち御髮焦がれ、  
炎の天蓋、火の背、  
天地あまねく火とぞなりて  
常代もくれなる熱に溶けつ、  
星さへ炎の花を蒔きしよ。

炎は一夜の露に消えて  
またもや營み、またも焼くる、  
われ盧遮那佛を下に見れば、  
あゝ大なるかな、すさまじきかな、  
常代の影かや顔に落ちて、  
光の背も影を返す  
日かげは寂しき光射れど、  
それさへ夕の帳垂れぬ。



暮れてはしばし無にや入るか、  
 元より無とは誰か語る。  
 くれなる炎と燃えし光は  
 こがねの色と照りし光！  
 像暮れなば光磨き、  
 新の佛建てよ立てよ。  
 三千世界を足に踏みて、  
 両手も延ばして長く、廣く、  
 百萬億劫指に弾き、  
 大悲の眼は更に笑みて、  
 月日と照らせば眉もさえつ、  
 額は圓に天を收め、  
 頬は潤ふ地を豊、  
 五岳に秀づる高き意思、

四水に溢るゝ清き情、  
 衣は寛の糸に織りし  
 さゝがに姫の妙の技や。  
 白きは蓮の慈悲の紋に、  
 赤きは牡丹の仁の模様、  
 薄きは薔薇の愛のしるし、  
 緑は松の勇の象、  
 菫の信に、竹の義に、  
 柳の自由、菊の孝、  
 ひらさき、くれなる、霞縫ひて、  
 しろかね雪練る肌を透し、  
 背に溢るゝ春の日かげ、  
 下にもかげさす秋の月夜、  
 血沙染まらば夏の大雨、



炎卷きなば冬の雄瀧  
つはもの寄せなば雲の鼓  
鬼神寄せなば花の吹雪、  
天地碎けば有無を練りて、  
新に作れや神の人を。  
常代も白妙、神の光、  
佛も花さく寂を笑めかし。

後之羽衣

樂劇



景

(一面雲霞中に星の光あり)

前唱

人の世の塵を拂うて羽衣や、  
 三保の松原立ちてより、  
 波もかゝらぬ清見海、  
 田子の浦曲を漕ぐ舟は  
 鳥か、木の葉か、うき島の  
 色沈み行くあしたかや、  
 富士の高根も雲となり、



霞分かすみくれば霧晴きりれて、  
 風はいつしか春知はるしらず、  
 夏秋なつあき知らず、時知らぬ  
 中なかに光ひかりるは白玉しらたまか、  
 星の宮居みやみは見えたり、  
 三つか、五つか、六つ、七つ、  
 天あまの河原かはらを越こえて照てる  
 虹にじの橋はしをも過すり行ゆけば、  
 限り知られぬ千ちよろづの  
 かれも嬉うれし、これも嬉うれし、  
 今いまぞ知るうれしさの  
 はては極きはまる月つきの園その、  
 我われ故里ふるさとぞうれしき。  
(香津良郎上り来る、漸くあかくなる、)

天人一

天人二

天人三

天人四

天人一

天人二

香津良

四人

香津良

一方より天人四人出て来る。  
 香津良の君か、いかにして、  
 いづく、いつしか行かれけん。  
 わか星か、ひこ星か、  
 よばひぼしにやさそはれて、  
 雲のあなたに流ながれてか、  
 雨あめに伴ともひ走はりてか、  
 霞あせのたより、音こゑづれも  
 無なくてさびしき霜しもの色いろ、  
 衣えに露つゆを  
 見たるぞや。  
 我われも始めてうれしてふ  
 こゝろ知りける初はつ旅たびは  
 星よりも、雲よりも、



天人一

香津良

天人二

天人三

天人四

天人一

四人

香津良

遙に低き人の世に、

何、人の世に？

思はず下りてまゐりたり。

こはめづらしき旅路やな、

風に問うても語らねば、

名のみ聞きたる人間の

いざ物語

し給へかし。

げに云ふもよし、聞くもよし、

様を學びて今茲に

下界の姿示さばや、

獨吟

春風や、春風や、

蕾ほのめく春風や、

花も柳も振分の

髪は額に肩過ぎて

獨りうつせば筒井筒、

ものともなしに物おもふ、

水も春めく心かな、

(この天人の手を取りて前へ引出す)

天人一

香津良

天人一

香津良

こは何故の思ぞや、

天に知られぬ戀といふ、

人の心の春ぞかし、

あやしき人の心かな、

あやしき人の心とは、

つれなの君の心かな、

君も男となり給ふ、



天人一  
香津良

春を浮かれて奈良の京、  
春日の里の七重、八重、  
櫻狩りては日を暮らし、  
夜のおぼろを獨り臥す  
我を夢にもよも知らじ。  
夢は雲井に無きものを、  
そはいつはりや西ひがし、  
朱に紫、色迷ふ  
夢も花さく春の癖  
男心ぞいと憎き。

(二の天人の手を取りて引出す)

天人二  
香津良

我は男も名も知らず。  
知らず知られぬ人をさへ、  
思ひくらす恨めしさ、

天人一

香津良

云はんとすれど口滿ちて、  
顔に汐さす胸の波、  
女心ぞいと弱き、  
弱きこゝろぞまことなる。  
をかしき人の心かな。  
何としてかなはぬぞ。  
それこそ人の世の習、  
或は親の心に合はず、  
人のさまたげ、世の關屋、  
一つかなへば、また一つ、  
さはりくして末途に  
かなふとすればまた亂る  
戀の心の多くして、  
風に吹かれつ、波につさ、



かなたに迷ひ、こなたに迷ひ、

(三四の天人を引出し)

亂れ心に我も亂れて、

憎くし、妬まし、恨めしやと、

追へば遁れ、走れば追ふ、

花の色香の盡させぬ限り、

はてしもあらぬいさかひぞや、

天人

あはれやな我手にて

こゝろひとつに繋ぎとめ

長きまことの樂を

夢に入りてか教ゆべき、

そは無益ぞや、御身さへ

人の間に入るならば、

思ひかけられ、追ひかけられ、

香津良

羽衣さへも汚されん、

我も危うく奪はれし

中を漸く遁れたり、

其仇心皆洗ひ、

清きなさけに包まばや、

清きなさけに包まんと、

思ふものさへありしかど、

それもはてなき人心、

夏としなれば名に狂ひ、

秋の風にも利を數え、

こがね、しろかね、星ならで、

暗き光に冬の夜は、

いのち恐るゝ老の阪、

我やまさらん、我越えんと、

香津良

天人



位争ひ、國争ひ、

一人、二人、千よろづの

つはものどもの戦は—

(暗くなる、天魔、鬼王大勢率ひて出づ)

天魔

茲に顯はす欲界の

姿に引かれまゐりたり、

我思ふ人いづれぞ、

我花の君いづれぞ、

鬼王  
天人

あら恐ろしや、今までに

龍も寄り來ぬ七寶の

垣もくもらす黒雲に、

瑠璃の宮裂くいなづまや、

馬か、車か、いかづちの

音に桂もはら〜〜

落ち行かんにも下界なり、

羽衣あれど鬼も飛ぶ、

天魔の力に引かれ引かれて、

何とかせまし、悲しやな。

(逃げまはる、鬼追ふ)

嬉しやな、美しくしや、

下界の色香身に染みて、

裾も痕引くおん姿

花は櫻か、桂姫、

取れや、春へや、黒雲に

載せて魔界へつれ行かん、

我こそこれよ、否我よ、

妨げなさは鬼とて魔とて

共に餌食となすべきぞ。

魔鬼



(皆香津良姫を追ふて互に争ふ)

(忽ち光さす)

あたまばゆしや此光、  
地獄見通す我眼

忽ちくらむで見えわかず、  
乙女はいづく、いづくぞや

(月天子青瑠璃の籠に乗り、白衣黒衣の天人

大勢従へて出づ)

魔鬼

あなをびたし乙女の敷、  
それも見えず、これも見えず、  
中に光るは誰ならん、  
寄ればよるめき、躍ればふるひ、  
飛びつかんにもたぢくく、  
惜しや、悲しや、苦しやな、

惜しや、悲しや、苦しやな、  
惜しや、悲しや、苦しやな、

(皆消ゆ)

香津良

云はん方なきおんめぐみ、  
云はん方なき我あやまり、  
唯々免させ給へかし、

月天子

抑々何に引かれてか、  
下界に獨り降りしぞ、  
君はきこしめさやりし、

香津良

雲を貫く善人の  
聲に引かれて思はずも  
行けば迷ふは世の常か、  
夢より外に入られぬは  
下界の人のはかなさよ、

月天子



香津良

其はかなさにいと、尙

月天子

道を守れる心あり、  
それぞ涙を灑げかし、

香津良

露は花にも置くものを、  
人の中にも身に染めて

月天子

散るものちと笑むもあり、  
そは餘りあるなさけより

香津良

地に下したる若者よ、  
されば茲をも思ひ出で、

天人

技に現はす様々や、  
其物語し給へかし、

月天子

鬼もこれにはよも害せじ、  
げにいかならん、いにしへの

智恵は下界に届ますや、

香津良

さては面影傳へばや、

(白衣となる、宮殿樓閣現はる)

見給へや、これこそは

寶樓閣を想ひやり、

朽ちぬすまひとかこどりし、

中にすうるは我姿、

いつの夢にや歸りけん、

彫りて刻みし面影に

ものは云はねど、動かねど、

我もほゝえむ色染めて(紫衣となる)

君も諸共描き取り、

かくさまゝに合せては(畫樓となる)

迦陵頻伽の聲學び、

糸に鳴らしつ、竹に吹き、



月天子

はては歌ひつ、動き出で  
舞ふや霓裳羽衣の曲。  
茲のしらべと違はずや、  
共に比べて舞へや、舞へ。

(月天子白衣の天人を率ひ、香津真嬪  
黒衣の天人を率ひて舞ふ)

合唱

天津風、天津風、

いたくな吹きそ人の技  
雪の通路吹拂ひ、  
こなたに引きて比べばや。  
あはれ花の露飛び、  
ちるも妙なる露の玉  
磨けくや羽衣に  
塵はつきても薄霞

いざや君も、

拂ひ拂へば汗出で、  
眼まじろくやたがらす  
つきよみをとこ茲ぞかし  
不老の門の花染めず、  
長生殿の雪消えず、  
雲霧越えて尙思ふ  
かなしみ、たのしみ、よしやよし、  
我も舞へや歌へや誰が鼓、  
打てや、鳴らせや、琴の音に、  
花と舞ふは人の技、  
雪と舞ふは天の技、  
散ると見るは人の目、  
廻ると見るは天の目、



散るか、廻るか、花か、雪か、  
天も、地も、人もひとつ、  
共に舞ふこそはてなけれ、  
共に舞ふこそはてなけれ。

(先の明治三十五年十二月文藝界に出しつ)

ねぎめぐさ 畢

同じ著者に依て	夜露集	詩	既刊
春雪集	同	同	同



明治三十九年六月五日印刷  
明治三十九年六月十日發行

不許複製

定價金六十錢

著者 高安月郊  
發行所 東京市京橋區五郎兵衛町二十二番地 金尾種次郎  
印刷者 東京市京橋區築地二丁目二十番地 河本龜之助  
印刷所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 林文會社

發兌元  
發賣元

東京市京橋區五郎兵衛町二十二番地  
金尾文淵堂  
大阪市東區南渡邊町  
杉本書店



文淵堂圖書發賣元

東京市神田區表神保町 東京堂書店  
 東京市神田區裏神保町 東京堂書店  
 東京市京橋區上田屋 東京堂書店  
 東京市京橋區尾張町二丁目 東京堂書店  
 東京市日本橋區吳服町 東京堂書店  
 東京市京橋區中橋廣小路六番地 前川榮閣  
 京都府京都市東區丸太町 東枝律書房  
 大阪府東區南渡邊町 杉本書店  
 久留米市米屋町 菊竹金文堂  
 名古屋市宮町一丁目 星野文星堂

金尾文淵堂發兌圖書目錄

網島梁川著 病問錄 三版 小包料壹拾錢 小包料壹拾錢	中村春雨著 新約物語 三版 小包料壹拾錢 小包料壹拾錢	同 舊約物語 近版 小包料壹拾錢 小包料壹拾錢	中村春雨解說 畫キリスト物語 新刊 郵金拾二錢 郵金拾二錢	五十嵐力著 兒童の研究 新刊 小包料壹拾錢 小包料壹拾錢	山路愛山著 社會主義管見 新刊 郵金七十五錢 郵金七十五錢	子規自筆 俳人芭蕉 木本版 郵金七十五錢 郵金七十五錢	木下尚江著 火の小說書類 三版 郵金卅六錢 郵金卅六錢
--	---	-------------------------------------	---	--	---	---	---







同	與謝野晶子作	同	與謝野鐵幹作	同	與謝野鐵幹作	同	同	同	薄田泣菫作	巖谷小波著	佐野天聲著	大倉桃耶著	
小	み	毒	む	行	白	暮	白	(四)	喜	露	琵琶		
	だ		ら		く	玉	笛	羊	詩文書集類	劇	の	琵琶	
	れ		さ							七			
扇	髮	草	さ	春	姫	集	宮			草	曲	歌	
版四	切品	切品	切品	切品	刊新	版三	刊新			刊近	刊新	版四	
郵金 三 十 五 錢	近	近	近	近	郵金 八 十 錢	郵金 六 十 錢	郵金 六 十 錢	小 金 包 料 壹 圓		郵金 七 十 錢	郵金 六 十 錢	郵金 六 十 錢	郵金 六 十 錢
錢	刊	刊	刊	刊	錢	錢	錢	錢		錢	錢	錢	錢



